

たる傾向なく、無二無三にこれに向つて攻撃を執行したので、敵は爲めに我軍の勇猛に氣を吞まれて終に此日の攻撃も失敗に終るに至つたのであるが。此の黒鳩公大將の攻勢移轉を物も美事に散々に打ちこはした第一の大原因は、第二師團が全力を盡しそれに第十二師團の左翼隊が加勢して、昨夜夜どをしに奮迅格闘したる饅頭山の占領が、敵の右旋廻の樞軸を奪ひ取つて仕舞たのが抑、敵の腰を折つたる大主因であつて。此の遼陽會戰の勝利は全く饅頭山の占領によりて決定したのであるから、第二師團と木越旅團の功や實に双手を高くあげて、大讃辭大萬歳を浴せかけるに充分であるのはいふ迄もない。

二日午前九時前後に於て軍司令官から、三道覇に向つて追撃前進の命令を石廠の昨夜露營の位置で受領したる井上師團長は、直ちに左の如き要旨の命令を下した。

一、右翼隊ハ五頂山方向ヨリ次山南方標高一三〇高地附近ヲ占領セル敵兵ヲ攻撃スベシ

騎兵聯隊ハ師團ノ右側ニ在リテ半拉子山方向ヲ警戒スベシ

二、歩兵第十四聯隊第三大隊ハ右翼隊ノ右ニ連ナリテ攻撃スベシ

三、左翼隊ハ一部ヲ以テ第二師團ヲ援助シ主力ヲ以テ師團ノ攻撃ニ參與スルヲ勉ムベシ

四、總豫備隊(歩兵第十四聯隊第三大隊欠)ハ五頂山附近ニ前進スベシ

即ち井上第十二師團長は、第二師團方面の敵の頑強なる抗抵を以て全く窮鼠の反噬と考へたので、又自己の前面即ち炭坑附近に昨日出て來た敵兵も、これも無論退却掩護の一部隊に過ぎぬのであると考へたので。右翼隊と志波大隊とを以て之を攻撃せしめて、其右側を相浦大佐の騎兵に命じて警戒させて、さてどこ／＼迄も協同動作の本能を發揮して。昨夜一睡もせずして第二師團に加勢して饅頭山を殆んど占領した大功がありながら、まだ／＼それで我が加勢の責任終れりとせずして、矢張左翼隊をして其第二師團の追撃に加勢せしめて。さて其主力を以て師團の追撃的攻進の方へも参加せしむる様に

して、自から其總豫備隊を引率して五頂山に向つて前進したのであつて。此の師團長の處置は全體に於て同意である適當であると評者は考へる。

以上の命令の如く著々追撃前進の準備にかかつて居ると、次山南方標高一三〇高地附近に居た新來の敵兵、即ちオルロフ少將の豫備師團は朝來其隊を展開して、漸次我を攻撃せんとする模様を現はして。右翼石山より蔡家溝を経て張家堡子に亘る高地まで前進して、其運動は猛烈ではないが確かに攻勢移轉の勢を示して來たので。我右翼隊は大に之と火戦を交へつつ昨夜の陣地より谷を越へて前進して、右翼大窰より左翼柳樹溝に亘る高地を占めて、猛烈至極に高粱の中でまご／＼して居る敵を射撃し。其右方即ち下窰の方から近よつて來た志波大隊は、進んで敵の最左翼に居た石山の敵を攻撃して、直ちに其山頂を占領したといふ頗ぶる順潮なる勢であつた。

又左翼隊は昨夜の位置の儘で、歩の第二十四聯隊が前黒英臺北方千米突の高地を堅固に守備し、其右の松樹嘴子南方高地には羽生少佐の歩兵第四十六

聯隊第一大隊の二中隊が居り、同聯隊の第三大隊と第一大隊の二中隊とは、饅頭山の東北に位置して歩の第二十四と歩の第三十聯隊との間を守つて居たのであつたが。師團の追撃命令が下されてから少しすると、羽生少佐の守備地の前に有力なる敵が追つて來たので、豊田龍成大隊長は其大隊と羽生少佐の二中隊をも引率して、今迄占めて居た饅頭山東北の陣地を引きあげて松樹嘴子南方高地に赴援し。斯くて歩兵第四十六聯隊の第二大隊はここに始めて一地に集結して、其右斜めの方向に右側を曝露して右翼隊と交戦しつつある、オルロフ支隊の右翼から遠慮會釋なく烈しい側射を指向したのであつた。

以上の如き形勢であるから我が追撃は容易に進捗する模様ではなかつたのであるが、頑強堅忍極まりなく其上大敵をもともせずして攻撃する我右翼隊の勢に辟易したのか、オルロフ少將が急に今迄の態度を一變して退却を始めたので。左なきだに敵の動作を退却掩護とのみ信じ切つて居る島村旅團は、それとばかりに其機をばづさず猛進して瞬くひまに敵の陣地を占領し

て、其退却する敵に向つて猛火を浴びせたので敗れて退ぞく等の考でなかつたオルロフ少將の支隊は、我が田上他次郎少佐や中川福雄少佐の大隊から散々な目に合せられ、其上高梁といふ展望遮蔽運動障礙物の爲めに大混亂に陥つて、此の二日の正午過ぎには全くの大潰走をなしつつ、大洪水の如く鐵道線路を烟臺停車場の方へ急流的に退却した。此時次山南方標高一三〇高地に出た田上大隊を西方から猛撃する敵砲兵があるので、我損害は實に容易ならぬ有様であつたが、これを見た中川少佐は此敵砲兵を連家屯にあるものとして、奮勇挺進其東方の高地まで邁進するといふ勢であつたので。敵は散々なる目にあつて退却し、我軍も亦敵の有様の頗ぶる優勢であるらしいので、猥りにこれを追撃せずして此の陣地を堅固に占領して停止したのであつた。

此日右翼隊の右翼に連なりつつ獨立して敵を攻撃したる、志波今朝一少佐の大隊は先づ第一に石山の敵を追ひ落して、其山上を占領して見ると今や敵は引き色を見せて居る。さともそれを看破したる志波大隊長は、其隊の寡

走潰ノ軍露近附山次



畫道白原石人道九十九

少なる兵力なるにも頓著せずして、直ちに其北方の貴子山の敵を攻撃して之を占領し、其中に後方から此の方面の加勢に來た我師團の砲兵第四中隊が砲撃を始めると同時に、凡盛堡東北高地を占領し勢に乗じて長く其手を延しも延したり、終には烟臺炭坑東方の礮奇山迄を占領したのが午後五時頃であつたが。此の志波少佐は僅僅一大隊の兵力を以て、延長一里以上に亘る石山から礮奇山に至る、烟臺炭坑東方高地一帯を占領して、其疾風迅雷的の行動は、敵をして我兵力の非常に優勢なるを思はしめた。此の機敏にして勇敢なる志波少佐の行動は、我兵力を臆病なる敵に過大視せしむる上に於て、非常に大なる効果を奏したものと云ふてよいと評者は信ずる。

又左翼隊の方では主力を以て次山攻撃を加勢せんとしたが、第二師團からも加勢を望んで來た上に前には強力なる敵が居るので、終に動くことが出來ず現在の陣地を守つて日を終つたが。此夜夜を徹して饅頭山へ敵が恢復攻撃を何度もくり返した爲めに、左翼隊の大部分は殆んど夜つびて其陣地を守つ

て居たのであつた。二日は先づ以上の如き景況で第十二師團の戦闘は終つたのであるが、此の次山附近の占領と炭坑東方一帯高地の占領とは、敵大將の攻勢移轉の企圖を非常に困難ならしめて、其上其最左翼に出でたるオルロフ支隊を散々に撃破したる其功績は、昨夜に於ける第二師團の饅頭山占領と匹敵すべきものであるが。併しこれは敵が自働的に退却したのに乗じて勝を占めたのであつて、第二師團が再三再四突撃して饅頭山を占領して、此の二日も終日寶淨山を始めとして三方四方からの、莫大なる砲數の砲撃を忍耐して死守したる上、此の二日の夜に殆んどこれを敵にとり返されて、さらに獅子奮迅の勇を奮つて之を再び占領して、終に黒鳩公大將をして攻勢移轉を斷念せしむるに至らしめたに比較しては、其戦闘に及ぼした効力は同一であつたかも知れぬが。彼は實力實行を以て功を奏し此は其間に幾分の僥倖が加はつて居たのは事實である。

二日午後十時半に更に軍の追撃命令が到着したので、第十二師團は三日の

爲めに左の如き部署をした。

- 一、左翼隊は三日午前六時迄に第二師團の運動に連なりて三道嶺に前進の準備をなす
 - 二、右翼隊は同時迄に左翼隊に連なり炭坑鐵道方向に前進の準備をなす
 - 三、志波少佐の指揮する歩兵六中隊、騎兵一分隊は次山南方高地を守備し師團の右側背を掩護す
 - 四、後備歩兵一中隊、同騎兵一小隊より成る黃堡守備隊は次山守備隊と連繫し半拉山子方面を警戒す
 - 五、本隊は三日午前六時迄に五頂山南方に開進し騎兵聯隊は志波大隊と協同し師團の右側を警戒す
 - 六、架橋隊は軍工兵部長の命を受け近衛師團の爲め太子河に架橋す
- 第十二師團長が以上の如き部署をしたものであるから、左翼隊の木越少將は之を實行せんとして午前四時から命令を下して前進準備をして居たが、午

前七時頃になると第二師團の前黒英臺北方丘阜にある兵が前進する模様が見へたので、それに連繋して其二箇聯隊を楊家堡子附近迄進めて、其旅團の實況を井上師團長に報告すると、同中將から午前十時十五分に於て、左の如き注意を受けた。

『貴官ハ充分前面ノ敵情ヲ搜索シ孤立ニ陥ラサルヲ要ス』

といふ注意的訓令を受けて考へて見ると、第十二師團も其後前進はかゝしからぬ有様であり、右翼隊もまだ其儘で動かずに居る模様であつて、其上前方には敵の歩兵騎兵が頻りと出沒する有様であるから、一度楊家堡子の線まで進んだ歩の第二十四及び歩の第四十六兩聯隊を、再び今朝の現在地に招還して所要の防禦工事を施こさしめて、能く敵情を搜索したる後命令を待つて前進すべく處置をした。一體昨夜の師團長の部署に依れば午前六時迄に準備を整へて置けといふのであるから、別命がなければ前進すべきではないのであつて、木越少將の前進をさして後に井上師團長に報告したのは少しく專

擅に過ぎたのであるが、師團長の注意でこれに氣がついて直に舊位地に戻つて陣地を占領したので、さしたる失態を生ずるには至らなんだ。又左翼隊は前進準備を整へた而已で動かなかんだ中に、午前九時五十分第二師團長から井上中將に左の通報が來た。

『師團ハ昨夜徹宵交戦シ敵ヲ撃退セシニ因リ本日ハ現在ノ姿勢ニアリテ停止ス』

右翼隊は師團司令部の位置が近いので直ちに其旨を傳へられて、其儘動かずに現在陣地を堅固に守備した。斯の如くにして第十二師團は第二師團が前進せぬのに、獨力前進して見ても前面には目に餘る敵の大軍が充滿して居るのであるから、到底其追撃の目的を達し得ることが困難なので、全師團の各隊は陣地を占領して近く敵と對峙しながら、遂に此日は戦を交ゆるに至らずして日没に至り。空しく敵の大縱隊と長大なる列車とが頻りと奉天方向に退却するのを袖手傍觀したのは、残念至極な齒痒ゆいやり方であつたが、兵力

の懸隔は此の策に出るの外に詮方がなかつたのは實際である。

軍からは昨夜追撃命令が出たけれども、昨夜以來今日も饅頭山には殆んど繼續して繰り返し、非常に優勢なる敵の強襲を蒙つたので、第十二師團而已が孤立して飛び出すといふ譯にはゆかず、已むなく其儘にして空しく一日を徒費したのであつたが、非常に彼我の兵力が懸隔して居た上に敵は全くの敗退でなくして、我に向つて攻勢に轉せんとして烟臺炭坑東方の高地線より、太子河に亘るの間に兵力を集中したのである。そこへ黒木軍の二箇師團が衝突したのであるから、此日此の師團が前進の出来なだのは已むを得ぬ次第であつて。若し此の場合獨力で突進すればそれを益、状況が不利に陥るのであるから、第二師團と共に既占の陣地を堅固に防守したのであつて。つまり此所に至つて始めて始めて黒木軍司令官の情況判断の誤りが、具體的に戦闘の上に影響して來た次第であるのだ。

次で三日の午後十一時過ぎにも軍の追撃準備の命令があつたので、同夜半

諸隊に命令して四日午前七時出發準備を整ふべく申付けて、右翼烟臺炭坑から貴子山、連家屯東北高地を経て柳樹溝西南方に亘る線に據つて居たが、四日午前五時少し前に近衛師團が此方面に進出するのが、此の四日の午後になるといふことが知れたのでそれが來てから追撃に移ることにして、それまでは現状を維持せよとの軍通報を受領したので、又々此日も一日此所に何の爲すこともなく過ごさんとしたのであつたが、其眼前を敵の大軍が北方に向て續々退却することは實に三日よりも更に一層多數であるが、悲しいことには我れに兵力がないので如何ともすることが出来なんだ。

軍司令官は依然蓋州城に在つて近衛師團の到着を待つて居ると、四日午後一時寶淨山が其手に入つた報告が來た上に、其近傍の敵が續々北方へ退却して止まつて居るものも多からざる模様であるとの報を得たので、ここに井上中將は此の機に乗じて追撃に移らんとして、其趣を第二、第十二兩師團へ通報したが、それと同時に軍から兩師團長に徴してやつた此追撃に付ての意見は、

此日午後二時前後に何れも師團長の手に届いたが、兩師團長とも符節を合すが如く此追撃に不同意をとなへて

『今ヨリ直チニ追撃ニ移ルハ其實行頗ブル困難ニシテ且ツ其運動開始ハ日没ニ至ルベシ』

といふ意見を具申して來たのであつた。一體今迄が非常に劣勢なる兵力を以て、大優勢なる敵を無二無三に攻撃して彼をして攻勢移轉を斷念せしめた程であるから、此の兩師團の疲勞困憊も極度に達して居たに相違ないが。第十二師團の如きは昨日一日殆んど交戦をせなんだのであつて、第二師團は昨日は随分と相當に惡戦をしたけれども、昨夜以來大に順境には入つて今朝からは追撃を準備して居た筈である。然るに今軍司令官からの追撃前退の意見を尋ねられるに當り、何れもそれを難んじて之に應じるを躊躇したのは其意を得ぬ。勿論それが敵が非常に優勢であつて、縦ひ退却するとしても輕舉してこれを追へば、却つて彼の爲めに逆撃せられるといふ意見なれば格別。井

上中將も西中將も何れも申合せた様に、其出發準備に手間どれるから其前進が日没になる、それであるから今からの追撃は大困難であるといふ意味の返答である。此の意見具申は乍失禮評者から見れば兩師團長の職務怠慢といはねばならぬ。第二師團長は昨日惡戦をして居たからまだ、恕する所があるとして、第十二師團の如きは昨日三日九一日を遊んで居て、部隊の整頓と追撃前進の準備にのみ此一日を費やして、更に今四日も午後一時軍命令の出る迄何にもせずに、追撃の命令を待つて居た筈であるのに、それが一時の命令に對して日没でなければ運動が開始せられぬといふのは一向合點がゆかぬ。

要するにこれ其眼前に展開したる敵の大縦隊の無數の退却を見て安心し、連日連夜の戦鬪の爲めに困憊疲勞した折柄不知不識の間に油斷が生じ、其上近衛師團の到着まで追撃前進を延期するといふ所の通報で更に其氣が緩んで仕舞て。今我が勝利を十二分に擴張すべき此の大切な時機に於て、まだ、容易に追撃などは始まるまいと油斷して休んで居たに相違ない。それである

から即刻追撃の軍通報に接して、何れの師團も其準備が出来て居らぬ爲めに、前述の様な意見具申が出たのであつたらふ。歩兵操典第二部第七十四に曰く「凡ソ戰勝後ニ於ケル一般ノ状態ハ動モスレバ現況ニ眩惑シテ半途ノ成功ニ甘ンジ往々果敢ナル追撃ヲ躊躇シ功ヲ一篋ニ缺クニ至ルコト多シ故ニ各級指揮官ハ敵兵退走セバ直ニ猛烈ナル追撃ヲ始メ之ヲ窮追シ敵ヲ殲滅シテ戰勝ノ效果ヲ完ウスルコトヲ勉ムベシ」

と明白に戒告してある如く、多くの場合半途の成功に眼がくらんで仕舞て、折角今一息といふ所で油断するのが多いのである。

抑、追撃なるものは我勝利を此の瞬間に數倍にし得るものであるから、如何に苦しく如何に疲れて居らふともこれを決行せねばならぬのである。況んや既に二日も前から其準備をして前進を待つ外に用のなかつた第十二師團が、午後一時から日没に至る迄かからねば追撃實行が出来ぬといふのは、實に頗る平仄の合はぬ話しであつて。これ要するに油断である油断は實に大敵で

ある、今や我が第十二師團は眼前に大敵を控へた上に、更に味方の心の中にも油断といふ大敵が出来たのであるから、これ實に容易ならざる大難境に陥つたのであつたと評者は思ふ。

軍司令官は諸種の情報からは非其追撃決行を必要として、第十二師團には炭坑附近に一部を残して大英城子、小三道覇に追撃せしめ。第二師團には寶淨山に一部を残して、主力を以て大三道覇に直ちに前進すべく命令した。然るに第十二師團から更に午後三時半に

『師團前面ノ敵ノ所在地確實ナラズ前進ノ實行ハ夜ニ入ル可キモ進路ニ好目標ナク暗夜ノ前進ハ殆ンド成算ナキヲ以テ該運動ヲ中止セラレタシ』

といふて來た。これ元來井上師團の怠慢で現に昨日充分に敵情を搜索せよといふ注意もあり、昨夜も一昨夜も追撃準備を整へよとの命令があつたのに。此様に不準備不整頓で居たのであるからこれは一言の辯解も許さぬ全く第十二師團の怠慢である。が併し其様に追撃の準備も出来て居らず、又敵情も極

めて不確實であつたとしたならば、今此の午後の三時過ぎからこれに追撃を始めさせるのは實に頗ぶる危険である。これは軍司令官なるもの大に考へねばならぬことであると評者は思ふ。

此の第二回の運動中止を第十二師團の申出た時、第二師團からは直ちに運動に著手すといふ報告が來たので、更に第十二師團に勉めて迅速なる方法をとつて軍命令を實行せよといふ命令を下したので。第十二師團は餘儀なく此の午後三時過ぎから不準備千萬な部隊を追撃に驅り出して、暗中をしかも不確實な敵情に向はしめることになつて仕舞た。然るに一方此の直ちに追撃に著手するといふ西中將の報告は、全く軍司令官に一時氣休めをいふたものであつて、此夜午後八時四十分に至り第十二師團から第十二師團に對して

『師團ハ明朝ヨリ攻撃前進ニ移ル』

といふ通報が來たけれども、二度迄中止を希望してそれを否認せられて更に命ぜられたる前進を、如何に何といふても第十二師團が明日にしたからとい

ふを口實に延期するといふのは、何となく卑怯未練の様で頗ぶるそれを行ふに心苦しい。而已ならずさう度々命令を變更しては部下の信用を全く失墜して仕舞から、井上師團長は斷然午後十時を以て左右兩翼隊ともに前進に移ることにした。いふ迄もなくそれ迄に充分に敵情を搜索し前進の準備を遺漏なくして置くべきを怠つたのは、これは全く井上中將の過失であるからこれを責むるはよいけれども、現在其準備が不充分であるからして二度迄も中止を申出たのを、第二師團の無責任なる一片の報告を信じて其實行を強いたのは、軍司令官も大敵を前にして居る場合としては、少しく無謀なるやり方であつたと評者は思ふ。況んや西第二師團長が巧に其場合をつくろつて置いて、事實は明朝から前進する様にやつた如きは、非常に姑息なる手段を弄したるものであつて、爲めに第十二師團を孤立に陥らしめたといふても誣言でない。西中將の報告の真相をも確かめずして一意急に敵を追はんとして、第十二師團に前進を強いた爲めに、第十二師團は夕方から前進準備にとりかかつて、

其右翼隊島村少將の如きは本隊に還る砲兵と暗夜途中で衝突して、前進容易にはかどらぬ所から昨日の不充分なる搜索を信じて、遙かに敵に近い所まで前進してそこで其隊を集合せしむることにしたので、まだ其隊の集合を終らぬ中に突然敵と衝突するといふことになつた。島村少將が輕率なることをしたのも無論よろしくないが、要するに其根元にさかのばれば第二師團が一番わるいのであつて、自分も準備が整ふて居らぬ以上は明日でなければ出發が出来ぬと、男らしくきつぱり軍司令官に斷はればよいのであるのに。直に著手するといふ様ないひ加減なことを返答したので、其飛ばしるを喰つた第十二師團は夜中から出發して、集合せぬ中に敵と衝突するといふ様な不しだらを演じたのであつて。總てが油斷したのがよくないのはいふ迄もないのであるが、就中第二師團の其場をつくらふたる報告は頗ぶるよろしくないと評者は思ふ。

斯くて敵は充分に其退却の準備を整へて退却したので、如何に急追しても

大なる効果は最早得られぬ時機であつたに係はらず、周家達連溝附近の一不意の遭遇戦に於て、第十二師團は殆んど無益に六百近い死傷者を作つて、其戦闘参加員の一割二分以上の損害を受けたのは、全く残念千萬な出来事であつたと評者は考へるのである。これ蓋し各師團から常に其現況を詳細に軍に報告せぬので軍は師團の現在の事情に疎く、そこへ以て來て一時を誤間化する様な體のいい報告を第二師團が出したので、益真相が軍司令官に知れぬ様になつたので。強て第十二師團を夜半に追撃に驅り出すに至り、爲めに此様な悲惨なる戦闘をするに至つて、更にそれより北方に追撃するの勇氣を全く失ふに至つた。これ實に何れにも罪があるけれども第一には第二師團の虚言が最もよろしくなく、それに次では島村少將の敵情不搜索が第二の過失であつて、兩師團を通じての過失は追撃準備をせずに油斷をして居たことで、軍司令官の過失はよく兩師團の現状に通じて居らなんだのにある。乍去殆んど三分の一程劣れる兵力を以て、しかも二師團弱の兵力を以て遠く敵の背後に入

り、約十倍にも當るべき敵總大將の指揮する敵軍主力と戦ふて、終にこれを敗つたのであるから。多少の過失や怠慢はあつたにしても、其功や實に偉大にして最初大山元帥が期待した如く、第一軍の力によつて遼陽の敵は始めて其堅陣を撤退するに至つたのであつて、批評はするものの黒木大將、井上大將、西大將の偉勳は萬代不朽であると評者は信ずる。

斯くて遼陽會戰はまたぞろ全然露軍の敗北に歸して、終に彼れは奉天に向て退却をなしたが、我軍も爲めに非常に其力を使用し盡したので、これを追撃すること能はずして烟臺附近を先頭として、一時停止してここに其隊伍を整頓し勇氣を養ふことにした。此戰に於ける露軍の失敗に就ては大に教訓となるべきことが多いのであるから、今からそれを指摘評論して此回の研究を終ることにし様と思ふ。但しこれは第十二師團に對した敵の動作ばかりでなく、露軍が第一軍に對したる攻勢移轉のやりそくないを、全部に亘つて批評するものであつて、少しく此の遼陽會戰に於ける第十二師團といふ標題に

は矛盾するが、それは場合によつては少しは範圍外へはみ出す様なこともあるものと、寛大に考られてこれをお咎なからんことを希望して置く。ではこれから愈、黒鳩公將軍が太子河右岸に其主力を移して、第一軍を太子河に壓迫せんと決心したる、八月三十日頃からの露軍の戰鬪に就て一言することにした。由來此の將軍が常に餘りに細心に過ぎて部下に對し干涉することが多かつた爲めに、時々大失敗を演じて居るのは事實であるが此場合なども、矢張大に其傾きがあつたのであるが併し其主原因は、全く餘りに其攻勢移轉の計畫が巧妙に過ぎたのに外ならぬと評者は思ふ。

敵の總大將黒鳩公將軍は八月上旬を以て、遠く其南方及び東方に出せる兵力を遼陽方向に退ぞけて配置を改め、其南部兵團を以て奥、野木兩軍に當らしめて、其東部兵團を以て黒木軍と對せしめ、其兵力の日本軍より優勢となるまでは眞面目の決戦を避けて、漸次に遼陽陣地に向て歩々退却を行ひ若し此地に至るも、尙其兵力充分ならざる場合には更に其以北に退却するの作戰計

盡であつた。からして極東總督アレクセエフ海軍大將から、奥軍の兵力減少せしの情報あるを以て、縦ひ南部兵團の一部でも支障ないから、南方に向つて攻勢を執らんことを懇願的に訓令せしも、黒鳩公大將は増援軍の到着中過早に攻勢に轉ずるの不利なるを主張し、日軍は其主力を減少せざる而已か營口に上陸せるの疑あり、又黒木軍にも増援到着を認めれば、攻防共に誓て充分に其準備を怠らざるべきも、此場合に於て攻勢に轉ずることだけは同意する能はずとして、極東總督の切なる希望を斷然として拒絶した。

事實に於ては此場合と雖も露軍は我軍より劣勢ではなかつたのであるが、黒鳩公將軍は連戰連敗の結果常に日軍を過大視して居たので、非常に其兵力に懸隔あるものと誤判して、其殆んど平均のとれる時期に至るまでは、時日の餘裕を得る如く巧に持久戦をなしつつ北方に退却するの方針を取り、常に早くから退却の爲めに諸準備を整へるに而已腐心した。此様に總大將が退却のことばかりを考へるといふ様では、到底將卒の志氣が振起する筈のもので

はないから、自然に全軍の意氣惰沈するに至るは已むを得ぬ次第であつて。よしや一軍團や二軍團の増援を得たとしても、それを得んが爲めに退却に退却を重ねた結果より生じたる、志氣の沮喪は到底之を補填恢復し得ぬのは明白なことであるが。單に數字的に且つ器械的に而已兵法を解釋して、微妙なる精神上の働といふものを頗る冷淡に見て居た黒鳩公將軍は、兵數を増加するといふ一點に而已重きを置いて其他を顧みるの暇がなかつた。であるから遼陽では是非大決戦をする／＼と聲言して置きながら、まだ其堅固なる設堡陣地迄退くには一日行程もある、南は鞍山站以南東は浪子山寒坡嶺以東に、其南東兩兵團の主力のある場合に於て。最早南部兵團の爲めに四條の退路を設けたる上に、更に遼陽以北に六兵站路を開設して、あの廣大壯麗を極めたる遼陽停車場も内々撤收の準備をしたのであつた。これ實に總大將が主力となつて自己の軍隊の志氣の破壊と勇氣の沮喪に熱中したと同様で、將卒ともに退却を以て能事となすに至つたのは實に片腹痛い限りである。

此の様に唯々數字而已に重きを置いて、無暗と慎重に無暗と大事をとつて居た黒鳩公將軍も、八月下旬に及んで數箇軍團の増援兵が漸次遼陽に到着するの運びに至り。日ならずして大兵力が遼陽附近に進來するの豫算が確立すると共に、大に其勇氣を振り起して、今までの遼陽以北にまで退路を設けた様な腑甲斐ない態度を一變して。急に大にりきみだして遼陽に退却するの必要なし、直ちに鞍山站浪子山の線に踏み止まつて、日軍とここに一大決戦をなさんと決心して、今までの作戦計畫を急遽一變したのであつた。

評者は此の作戦計畫の變更を以て不當であるとすのではないが、現に其數日の前に於ては此援軍が輸送途中にあるのを知りながら、攻勢移轉を不利として遼陽停車場の撤退までを準備して、兩兵團長はもとより其部下諸將にも、輕戰敵の前進を拒止して遼陽陣地に退却する様命令し、場合によりてはそれ以北にも退却するといふ自己の意圖を示して置きながら。八月二十三日に援軍たる西伯利第五軍團の歩兵六箇聯隊が、奉天南方に集合し自餘の諸隊

も續々到着するといふので、突發的に今度は急に恐ろしく氣が強くなつて、現在の陣地に於て決戦をし様といふのは、餘りに其決心が輕率で其計畫が朝三暮四的であるといふを憚らぬ。此時南、東兩兵團共に一時的の防備をした而已で、黒鳩公將軍の退却を主とする計畫を基礎として、鞍山站も浪子山も元より決戦的には其陣地が準備してない。單に陣地が決戦的に出來て居ぬのみではない、其守備する將軍の心の中ので考まてが一時的輕戰の覺悟であつて、全く決戦的には定まつて居らななのである。それを突然遼陽の前進陣地の様な所で決戦をすることにしたのであるから、萬事萬端が手違ひや行違ひだらけであつて、遂に諸所方々に日軍の乗ずる所となるべき隙を醸したので、忽ちにして寒坡嶺浪子山の線をも守る能はざるに至り、遼陽陣地に向つて總退却をするに至つたのである。若し此の場合に於て餘りに此様な突然な計畫變更をなさずして、前の計畫の通りに漸次に遼陽陣地に退却して、此所で増援軍團と合して一大決戦をしたならば、鞍山站や寒坡嶺で甚しく志氣を沮喪

せしむる様な戦を交へなただけでも、露軍の志氣の上は元より兵員減耗の方面から見ても頗ぶる利益であつて、此遼陽の防禦は今少し立派に今少し頑強に持續し得られたに相違ないと評者は思ふ。これを要するに此將軍は其決心が頗ぶる動搖し易いたちの人であつて、計畫が常に餘りに巧に過ぎたる上に、智恵が大に人に勝つて居て其反對に勇斷を缺いて居た爲めに、事々物々狐疑逡巡に陥り易き傾きがあつたので、其決心は頗ぶる不堅確で常に動搖しがちであつた。現に此の大決戦を鞍山站浪子山でやるといふ、作戰計畫の急變更の如きも其一例で、明かに彼れが其處置の輕率千萬に見ゆる程に其決心の堅からざるを示して居るではないか。由來此の將軍は智將である謀將である、が併し勇將でもなく剛將でもない、であるから矢鱈に敵を過大視して見たり、急遽其計畫を變更して強がつて見たりして、其決心が殆んど輕石か石鹼だまの如きものであつたかと疑はれる程にふは／＼して居たのは事實である。歩兵操典綱領第五の一節に曰く

「軍隊ノ志氣ハ旺盛ナラザルベカラズ狀況困難ナルトキニ於テ特ニ然リ抑、指揮官ハ軍隊志氣ノ中心ナリ云々」

陣中要務令綱領第六に曰く

「上略情況ヲ達觀シテ明斷果決、敏活ニ處置スルハ又部下ノ自信ヲ鞏固ナラシムル要件トス」

更に歩兵操典第二部第四に曰く

「指揮官ノ決心ハ須ク堅確ナラザルベカラズ決心動搖スレバ指揮自ラ錯亂シ部下從ヒテ遲疑ス」

何度も／＼繰返す様ではあるが、これ等の諸條項を熟讀玩味して翻て此の黒鳩公將軍の處置を考へて見ると、露軍の敗れたるは戦の罪でもなければ又將卒の弱い爲めでもない、全く此の一指揮官が其決心を爲すに當つて明斷果決の勇氣を缺き、一度決定したる計畫も忽ちにして逡巡し動搖し變更するといふ大弱點を有して居たので、それが爲めに連戦連敗の恥辱を取つたのであ

るといふのが至當なる評語であると評者は思ふ。

斯くの如くにして露軍の兩兵團は八月下旬に於て、終に餘儀なく遼陽設堡陣地附近に相集結して、此處に一大決戦を爲すといふ場合に至つたのであるが、此場合に至つても尙ほ且つ黒鳩公將軍は此堅固なる陣地に於て、充分に日軍を苦しめたる後大舉攻勢に轉ずるといふ覺悟が不確實であつて。無暗矢鱗と後方や側方に而已に心配して、此の堅固無双の陣地で日軍を十二分に喰ひ止め、其れを攻撃する爲めに日軍が非常に疲勞困憊するの機に乗じて、堂々として今迄の恥辱を雪ぐが爲めに、猛然起つて大攻勢移轉をするといふ勇氣なく。若し奥軍が遼河の方から來はせぬか、其場合には斯く、若し黒木軍が太子河を渡りはせぬか、其場合にはしかくと、頻りと場合を考へて豫定の計畫を定めるに而已腐心して、實際眼前に現出する情況に投じて、明斷果決敏活に處置し運動するといふ能力を缺き。徒らに各軍團長に機あらば獨斷攻勢に轉ずべしなどといふ訓令を下して。それで能事了れりと得意がつ

て居たといふのは、實に此の大將も思つたよりも甘いものであるといはねばならぬ。

如何に自己の手裡に澤山な兵力を掌握しても、まだ日軍を以て優勢なりと考へる所の、つまり先入が主となつたる松方侯爵のあだ名ではないが、後入齋の黒鳩公將軍が日軍の遼陽前面で非常に苦戦をして、其攻撃が少しも進捗せぬのを見て居ながらも、機に投じて攻勢に轉ずるの機動と勇氣なくして徒らに時日を費やして居る中に、果然黒鳩公將軍が先きの場合を考へて豫憂して居た如く、黒木軍は其左翼に於て機敏にも太子河をいつの間にかや

ら渡つて仕舞て居たのであつた。

此の報に接したる黒鳩公將軍は我が多智多謀なるそれ斯の如しといはねばかりに、直ちに黒木軍の太子河を渡りし場合に用ゆべく豫定したる作戰計畫を持ち出して、直ちにこれが實行にかかつたのであるが。其作戰計畫なるものは八月下旬遼陽陣地に於て日軍を牽き受くる場合に豫定したものであつて、

其大要は左の如きものであつた。これからが實は本問題たる遼陽會戰の第十二師團と關係のある戰鬪に移るのである、其計畫は隨分と大規模なものであつて頗ぶる巧には出來て居るが、それと同時に其實行は容易ならず困難なものであつた。即ち

一、遼陽南方の戰線を縮小し設堡陣地内に二軍團を止めて奥野津兩軍を拒止せしむ

二、先に右岸の備として時官屯附近に置ける第十七軍團をして饅頭山附近の陣地を固守せしめ同地より烟臺炭坑東方に亘る高地線に軍の主力を轉進せしめ其諸隊の展開了るを待つて總大將の一令の下に全體一度に攻勢に轉じ黒木軍を太子河に壓迫する如く饅頭山を樞軸として右旋廻的に攻勢に移る

其計畫や頗ぶる規模雄大宏壯にして、其やり方の一見巧妙なるは實に稱賛に價する様であるけれども、これが圖上戰術や兵棋ならば兎に角、實兵を以

て實地に於て行ふには頗ぶる困難なる計畫であつて、これ全く机上空論式の作戰計畫、畑水練式の攻勢移轉であるといふことは、評者にあらずとも何人もこれを否認するものはあるまい。其故如何にとなれば其計畫が餘りに巧妙に過ぎて、其實行は到底其様に都合よく行くべきものでないからである、いでや其計畫の頗ぶる不合理なるをこれから一々指摘して見様。

日軍が遼陽設堡陣地の前面に迫る迄には、奥軍も野津軍も其前進陣地で非常な惡戦をした爲めに、隨分と多大な損害をも受け容易ならざる兵力減耗の状態にあつたのは事實である。黒木軍の方は左までの大惡戦はせなんだけれども、これは其近衛師團を野津軍に加勢させて、僅かに二箇師團足らずの兵力を以て、孤立して太子河を渡つて背水の陣を張つたのである。よしや微弱なる梅澤支隊がリュボウイン少將を追ふて、奉天に向ふて進まふともこれは恐るべき程のものではない。日軍の南正面のものが繰返し々々突撃はするけれども、陣地の堅固と守兵の頑強の爲めに、殆んど其目的を達し得ずして非

常な逆境にあることは露軍にも知れ切つて居た筈である。露軍にも相當の損害はあつたらふけれどもそれは堅陣に據つて居るのであるから、日軍に比しては頗ぶる寡少なものであつたのは事實である。今や南正面の奥野津兩軍は連日連夜一週日に涉る激戦で、非常に兵力を減じ且つ其體力が疲勞して居る、其生氣あるは今や黒木軍而已といふてもよい。然るに露軍の方では前述の如く比較的損害も少なく、疲勞の度合に於ては大差はないとしても、其兵力が優勢であつた爲めにまだ、甚だしく疲勞して居らぬ新手もあるのである。此場合黒木軍に對しては其兵力多からずと雖ども、餘りに疲勞して居らぬピリデルリング大將の第十七軍團が向けてある、左すれば此の方面は實は左までに氣遣ふ必要はないのである。今や日軍は其南正面の主力は疲勞し盡して居る上に、其稍新鋭なる黒木軍は孤立して背水の陣を布き、且つ容易に主力の方に加勢に來り得ぬ位置に立つて居るのであるから。敵が自から求めて兵力を分割したと同様なる機に乗じて、何故に其設堡陣地に充分に日軍を牽き

つけて之を苦しめ盡して、其右翼からなり又は黒木軍と第四軍の中間からなり、或は又正面からなり何れからなりとも猛然起つて全力を盡して、敵の主力を破碎し盡すの勇戦を試みなんだのであるか。斯くしたなれば必ず大勝利を得たであらふ。よし勝利を得るまでには至らずとも、日軍南正面よりの攻撃はこれが爲めに一頓挫を來し、太子河右岸に渡つた黒木軍は其前面に有力なる第十七軍團を控へ、容易に前進することが出来ぬといふ羽目になつて。若し此の攻勢移轉が野津軍と黒木軍との中間突破式に行なはれたとしたならば、敵軍主力が全く前進の出来ぬ而已か黒木將軍も、其背後連絡線が非常に危険になるので、再び河を渡つて退却せねばならぬ様になるのは目前。何れにしても日軍は頗ぶる不利の状況に陥るのは確かである、然るに彼れ黒鳩公將軍は此の見易き道理を解せずして、前に述べたる様なる非常な大規模にして且つ巧に過ぎたる攻勢移轉を行ふた、これ實に此大將の考が評者には解釋することが出来ぬのである。

彼れは黒木軍が渡河したと聞くと同時に、八月三十一日から九月一日にかけて其主力を太子河右岸に移し。同二日を以て其各軍團を時官屯から烟臺炭坑間の高地に整頓展開し。其翌三日を以て一令の下に正々堂々右旋廻的攻撃を決行せんと計畫した。これが一旅團や一師團の兵ならば兎に角、約四軍團近くの十餘萬人の軍隊を近きも四五里、遠きは十餘里も移動せしめそれも現に交戦中のものを引きあげて、それを一方に轉進せしめるのであるから其混難は容易でない。隨て此の轉進の爲めに來す軍隊の疲勞は莫大なものである。其上に總指揮官一人は大規模の攻勢移轉を勇ましくやる腹案で居るけれども、肝心要めの其使用せられる部下の將卒は何れもこれを何と考へたかといふと、又例の豫定の退却が始まつたので種々なる口實は設けるものの、其實は遼陽が持ちきれぬからそれで川の右岸へ引きあげるのであると考へたのは尤である。此の悲觀的に陥つた將卒の考が其戰闘の上に大不利益を多大に持ち來すべきは當然であつて、其上に晝夜兼行で敵も居らぬ方面への移轉の爲めに、

大疲勞を我慢しつつ徒らに行動する彼等將卒の多くは、志氣は沮喪する不平は起るといふ其結果は、總司令官の伎倆に向つて頗ぶる不信用の目を以て之を觀察するに至るのは勿論である。斯く志氣の振はざる兵を以て數里に亘る線を占めて、再び敵に向つて攻勢的に前進せしめ様としても、それが豫定通りに運べる筈がないのである、獨りで強がつて獨りでよがつて居た黒鳩公將軍は少しもそれを知らなんだのである。

轉進第一日は支障なく事が進捗し、第二日も先づ相當に豫定通りに進行したけれども、此夜に於ては大事の大事の樞軸の饅頭山を敵手に委し、第三日にはオルロフ少將が眞つ先に潰走して御覽に入れた。しかもそのオルロフ支隊は單に自分の潰走に止めずして、御苦勞千萬にも西伯利第一軍團に其潰走のお相伴をやらせたので、ここで全く黒鳩公將軍の折角の攻勢移轉準備もめちゃ／＼になつて仕舞つた。此の間に於て最も人の氣に付く總大將の缺點は、頻りと干渉をすることである餘計なおせつかいをする爲めに、却つて其部下

諸將の間に行違や間違ひが生ずるのである。最初ピリデルリング大將に屬したるオルロフ少將に、後に直接に指圖をしたり參謀長から世話をやかせたりしたものであるから、終には此の少將の心中に疑惑を生ぜしめ、其決心を混亂し其行動を錯亂せしめて、彼れに警戒を與へるつもりで攻勢移轉一部の失敗を報じて慎重にさせ様としたものが、彼れには殆んど非常な大失敗を來した如く受けとれる様になつて、終に二箇師團を一身に引き受けたつもりで以てスタコラ／＼、烟臺目がけて逃げ出すといふ始末になつて仕舞つたのも、これを要するに總軍司令部が餘りに細部にまで干涉するからして得て間違が起り易いのである。

又左翼に出したオルロフ少將支隊が到着せぬ中に、日軍が烟臺炭坑東方高地を占領して仕舞ふ様なことがあつては、折角の攻勢移轉が不可能になるといふ所から、サムソノフ少將支隊を急行せしめて炭坑東方高地を占領せしめて置きながら、其後烟臺から炭坑に通ずる鐵道に沿ふて前進したるオルロフ支

隊には、敵が第十七軍團に向ふて西進したならば、其右側を衝く如く運動して之を控撃し。又敵が眞つすぐに北進をする様な模様であつたならば、烟臺停車場の方へ退却せよと訓令して。此の烟臺炭坑東方高地の占領が軍の攻勢移轉に非常に大功であるといふことを訓令せなんだので、同少將は九月二日第十二師團と衝突しての苦戦中に第十七軍團一部の敗戦の報に接し、更に西伯利第一軍團の所在不明であつて、自己の位置が甚だ安全ならぬ様に感じたるオルロフ少將は。此の炭坑東方高地を少しも大切と思はなんだものであるから、それを弊履をすてるが如くに放擲して、サムソノフ支隊の危険などには一切合切も構ひなく、さつさと退却する様な大失態を仕出がして仕舞た。若し最初の訓令に敵が北進したならば烟臺鐵道に沿ふて退却せよといふ様な餘計なことをいはずして、炭坑東方高地は我が攻撃移轉に最も大切なる土地であるから、これを堅固に占領して居れと訓令して置いたならば、如何に豫備師團の老兵が弱蟲どもであつて、オルロフ少將がよし餘り強くない人であつたと

しても、あれ程な大潰走には陥らなうであらう。即ち此のオルロフ少將の潰走は最初に與へた訓令が適當でない上に、其後度々命令系統を無視して直接種々なる干渉をした爲めに、如何にしたらばよいのか其目的が分らなくなつて、終には潰走するといふ様ななさけない羽目に陥つて仕舞つたのである。

右翼に於ては第十七軍團の一部が旋廻の樞軸を失ひ、左翼に於てはオルロフ少將が潰走をしたけれども、小達溝附近には西伯利第一軍團が進出して、此の軍團と第十七軍團の間には、ミシチエンゴ支隊の有力なる騎兵が其間隙を埋めて居り、右翼後には第十軍團も西伯利第三軍團も到着して居るのであるから、速にこれを前線に進出せしめて全力を擧げて攻勢移轉に努力すれば、よしや左右兩翼に於て多少の失敗位はあつても、兵力が頗ぶる優勢であることであるから此攻勢移轉は決して見込のない筈はなかつたのであるが。大切な明斷果決といふことの出来ない黒鳩公大將は、此の二日の正午までは自己の直接指揮する攻勢移轉は大成功と考へて居たらしく、第十七軍團

が饅頭山を失ひオルロフ少將が潰走するに至つて、大に其計畫の非運に傾きかけたるを憂慮はしたものの、まだ自己軍の状況を充分有利なりとして、二日の夜半十二時までは此の夜に於て饅頭山を日軍の手より奪還して、更に兵力を左翼の方へ集結して翌三日を以て、此の左翼の方から日軍を猛烈に攻撃せんとして、各軍團に向つて其準備運動をなさしめたのであつて。其間前述の計畫に基づき翌三日に關する命令を起草して居ると、午前三時頃到着したる設堡陣地のサルバエフ大將の悲觀報告を初めとして、同三時四十分にはシタケルベルグ中將の西伯利第一軍團の中立沿溝迄退却の報告に次で、ピリデルリング大將の饅頭山及び時官屯附近を併せ失ふたる、何れも極不良なる戦況而已の報告に接したのであつた。

左なきだに決斷に缺けたる所ある黒鳩公將軍は、此の諸報告を手にしてそれでも構はぬ今まで起草しつつあつたる命令の通り、左翼に兵力を集結して三日に於て日軍を其方面から攻撃するといふ決心を斷行するの勇氣がなく。

かてて加へて梅澤旅團がリュボウイン支隊の後を追ひ奉天に直進しつつあるのは、如何に此の不斷將軍の悲觀の度を深からしめか知れぬ。その上に由來黒鳩公將軍は日本軍には野津、奥、黒木三軍の外に、所在行動不明なる三乃至四師團の兵力があるものと憶測して居た。からして梅澤旅團を以て極めて微弱なものが孤立していたづらをして居るとは思はずして、全く此の行動不明に屬する幾師團か此方面に向つたと考へた。自己に利益な様に計算を立てるのも元より過失であるが、此様に敵にのみ有利なる判断を下すといふのは、それ以上不都合千萬なる所爲であつて、最も許すべからざる失態であるが。黒鳩公將軍は此の大過失を犯したので、何としても攻勢移轉の計畫を持続することが出来なくなつて、左の如き理由のもとにこれまでの折角の攻勢移轉の計畫を放棄した。

『今や露軍ハ太子河ノ線ヲ維持スル爲メニ死戦スルカ、遼陽ヲ撤退シテ奉天南方渾河左岸ノ陣地ニ退却スルカ、二者其一ヲ撰マザルベカラズ、然ルニ

太子河ノ線ヲ維持セントスレバ現ニ日本軍ノ占領セル炭坑南方高地ヲ攻撃セザルベカラズ、兵力疲憊シタル地形上之ヲ攻撃スルハ容易ナラズ、故ニ軍ヲ炭坑西北方ニ移シ此方面ヨリ同高地ヲ攻撃センカ我ニ有利ナルハ勿論ナレドモ、此運動間第十七軍團ヲ孤立セシムル而已カ、此ノ攻撃動作終結マデ太子河左岸ノ防禦ヲ維持シ得ルヤ否ヤノ大疑問アリ、若シ半途ニシテ敵ノ壓迫ヲ受ケ奉天ニ退却センカ、爾後ノ道路不良ニシテ軍ヲ全クシテ退却スルコト能ハザルベシ、之ニ反シ奉天ニ退却スルニ決センカ勇敢ニ守防セシ陣地ヲ敵ニ譲リ大ニ志氣上ノ不利アリト雖モ退却ハ容易ニ行ナハルベシ、故ニ此際後者ヲ取リテ奉天ニ退却シ援軍ノ到着ト高粱ノ收穫トヲ待チ、大ニ日軍ト決戦ヲ行フベシ』

勿論理由はある決して無意味ではないが、此様に石橋に兩杖をつく様にしてそれでもまだ恐ろしい様では、到底戦争は出来まいと評者は考へるのである。一體黒鳩公將軍は随分と手前勝手な理由をふりまはす人であつて、前に

太子河右岸から攻勢に轉ぜんとする場合には、左の如き上奏を全露皇帝陛下になして居る。

八月三十日及三十一日兩日黒木軍ヨリ攻撃セラルベク豫期シタル第十軍團ハ、第三及第一軍團陣地ニ反シ攻撃極メテ激烈ナラズ、想フニ黒木軍ノ主力ハ我左翼ヲ迂回シ、以テ我ガ交通線ヲ遮斷スルノ策ニ出デントスルヤ疑ナシ、狀況既ニ斯ノ如シ此レニ處スルノ方法唯二アルノミ、即チ精銳ノ豫備隊全部ヲ擧ゲテ第三、第一兩軍團ヲ授ケ、南方正面ニ於テ攻勢ニ轉ズルカ、或ハ前方陣地ヨリ部隊ヲ撤退シテ、黒木軍ニ對シテ強大ナル兵力ヲ集中シ、以テ背水ノ陣ヲ布ケル同軍ヲ渡場少ナキ太子河ニ壓迫スルカ、二者其一ニ出ヅルノ外ニ策アルコトナシ、下官ハ今其後者ヲ選ビタリ、其理由タル下官ノ部下ニ在ル總豫備隊ハ兵力不足ニシテ南方攻進ノ成功必シ難シ、然ルニ設陣地ニ退ゾケバ防禦線ヲ短縮スルヲ得ルヲ以テ、軍ノ大部分ヲ太子河右岸ニ移スコトヲ得ベシ、今黒木軍ノ占頭陣地ハ鐵道線ヲ距ル僅々十六

露里ニ過ギズ、敵ヲシテ我ガ連絡線ヲ窺ハシムルハ危險之ヨリ大ナルハナシ、故ニ我軍行動ノ目的ヲ軍ト後方トノ連絡線ヲ安全ナラシムル方ニ決定セリ

二十九日に於て歩兵五十一大隊半、騎兵三十中隊、砲百門の總豫備隊を有したる黒鳩公將軍は、此の時に於て尙其三分の二以内外の豫備隊を握つて居た、歩兵三十大隊騎兵二十中隊砲六十門といふは少ない兵力でない、これを西伯利第一、第三軍團に加勢するとすれば、是れ決して攻勢移轉に不足なりといふ程の微弱なものではあるまい。然るにこれを以て微弱にして到底見込なしとしたのも不都合であるが先づそれはよいとして、それ程に強大なる敵に對して其方面から三箇軍團を引き抜いて、それを遠く太子河の右岸に移して、二三日がかりで黒木軍攻撃の準備をするの餘裕と兵力があつたならば、何故にこれを以て南方攻進の兵力不足にして成功覺束なしといふことを得様、これ蓋し實際自分勝手な寢言に過ぎぬのである決して事實でないのである。

而してここに最も忌むべきことは、此の計畫が軍の主力を太子河右岸に集めてこれから攻勢移轉をして、敵を太子河に壓迫してそれから日軍全體に向つて、攻勢をとるといふ積極的の考でなくして。此攻撃の目的も全く軍の後方連絡線を安全にするといふ極消極的の考で以て、此攻勢移轉をやりかけて見たのである。此様な不確なる腑甲斐ない決心から出た攻勢移轉であるから終に不成功に終つたのであるが、此の場合思ひ切つて決行すればまだ充分に成功の見込があつたにかかはらず、無暗に日軍を過大視して大悲觀に陥り、又しても前述の如き手前勝手な理由を以て口實として奉天に退却することに決心したのは、よくよく此の將軍も退却好きの生れつきの人であつたと見える。

何故に四箇軍團を前線から引き抜いて、黒木軍に向はしむる程の餘裕と兵力とがあつたならば、それを第三、第一兩軍團の戦闘する南方正面に加へて、猛烈に攻勢に轉ずるの舉に出でなないのであるか、此方法をとつたとしたな

らば日軍を撃破し得ずとも、彼をして我設堡陣地前に於て閉口せしむる位は容易な業であるのは既に述べた如くである。野津與兩軍が南方で不利の戦に陥つたとすれば、二師團足らずの黒木軍が無謀に孤立して北進することは決して出来まい、よしそれが北進し様としても、第十七軍團が既に其方面に控へて居るのであるから、其様な勝手なことをするのを黙して見ては居らぬ。左すれば充分に南方正面に於て攻勢に轉ずるの成功は見込があるに相違ない、況んや日軍は既に一週日以上上の戦闘で人員は減少して、其困憊は極度に達して居たのであるから、黒鳩公將軍が猛然として南方に突出したならば、これを撃破し得たかも知れぬのである、否少なくとも日軍を苦戦に陥らしむることは出来たに極まつて居る。それを好き好んで暗夜に兵を退却させて、志氣を沮喪させた上に不平を起させて自己の信用を失墜せしめ。そして頗ぶる見込の少ない攻勢移轉をするといふ必要が何れにあるか。此の攻勢移轉の爲めの退却に當つて二千五百挺の土工具が、まだ運搬し切れずに敵前にあつたので

あつたが、これを兵卒に持たせて退却せしめんとした所が、將卒の不平はこれを快よく承諾せなんだものであるから、已むを得ずしてスルチエフスキ少將は一挺に二十四哥の賞金を懸けて、始めてこれを太子河の右岸に移さしめたと露軍の行動に書いてある。これ程に其軍隊が軍司令官の命令を重んぜず信用せぬ様になつては、これでは到底勝戦さの出来る筈がない、斯くまで將卒に不平を抱かせつゝ退却して愈々攻勢に轉ぜんとし、一二の蹉躓があつたけれども決して攻勢の見込が全然なくなつたでないことは、此の三日の兩軍の状況を見ても極めて明瞭であるのであるのに、又しても過早に此攻勢に見切りをつけて、奉天に向つて退却せんとして勝手千萬なる理窟をこねたのは、此將軍はどこへまでも理論家であつて全く實戦家でないのである。

既に勇敢に防禦したる陣地を棄てるのが志氣が大關係があることを知つたならば、何故に援軍や高粱收穫などを頼みにせずして、今一奮發して思ひ切つて攻撃を實行せなんだのであるか、大切な饅頭山をとられたけれども寶淨

山を占領して居れば、露軍の主力が左翼に集まる位の間第十七軍團が孤立して持ち堪へられぬ筈がない。又二、三軍團のよし兵力は減少して居るとしても實力を集めて熱心に努力したならば、よし堅固なりとも炭坑南方の高地位いが攻撃出来ぬ筈はないのである。左すれば此の黒鳩公將軍の退却の理由は全く理由となつて居らぬ。又前に皇帝に上奏して太子河右岸に其主力を移轉したる理由も、よくよく情況と比較してこれを熟考して見ると全く眞の理由になつて居らぬのであつて、要するにこれは黒鳩公將軍が自分勝手な不理窟をこねたに過ぎぬのである。此様に理由なき戦闘而已をしたものであるから、何等の得る所なくして遼陽を棄てて退却せざるを得ざるに至つたのである。惜しいことに此黒木軍に對する攻勢移轉に就て、各軍團が協力して熱心に攻撃に全力を盡したならば、決して見込の立たぬ程なことではなかつたのに、黒鳩公將軍が徒らに雄大なる旋廻攻撃を企て、しかもそれを自己の一令の下に整然として實行せしめんとして、矢鱈に掣肘して各軍團をして競ふて敵に

向つて進むの氣勢を殺ぎ、其間に時機を逸して敵に機先を制せられるに至つたのは、これ全く其攻撃の計畫が餘りに巧妙錯雜に過ぎて、其上に其指揮官に大磐石的大果斷がなかつたの、致す所であると評者は思ふ。

大正四年十一月二十七日印刷
大正四年十一月二十九日發行

戰史評論奥附

著作者

無名戰士

東京市麴町區平河町四丁目十一番地

發行者

宮本林治

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印刷者

山田三次郎

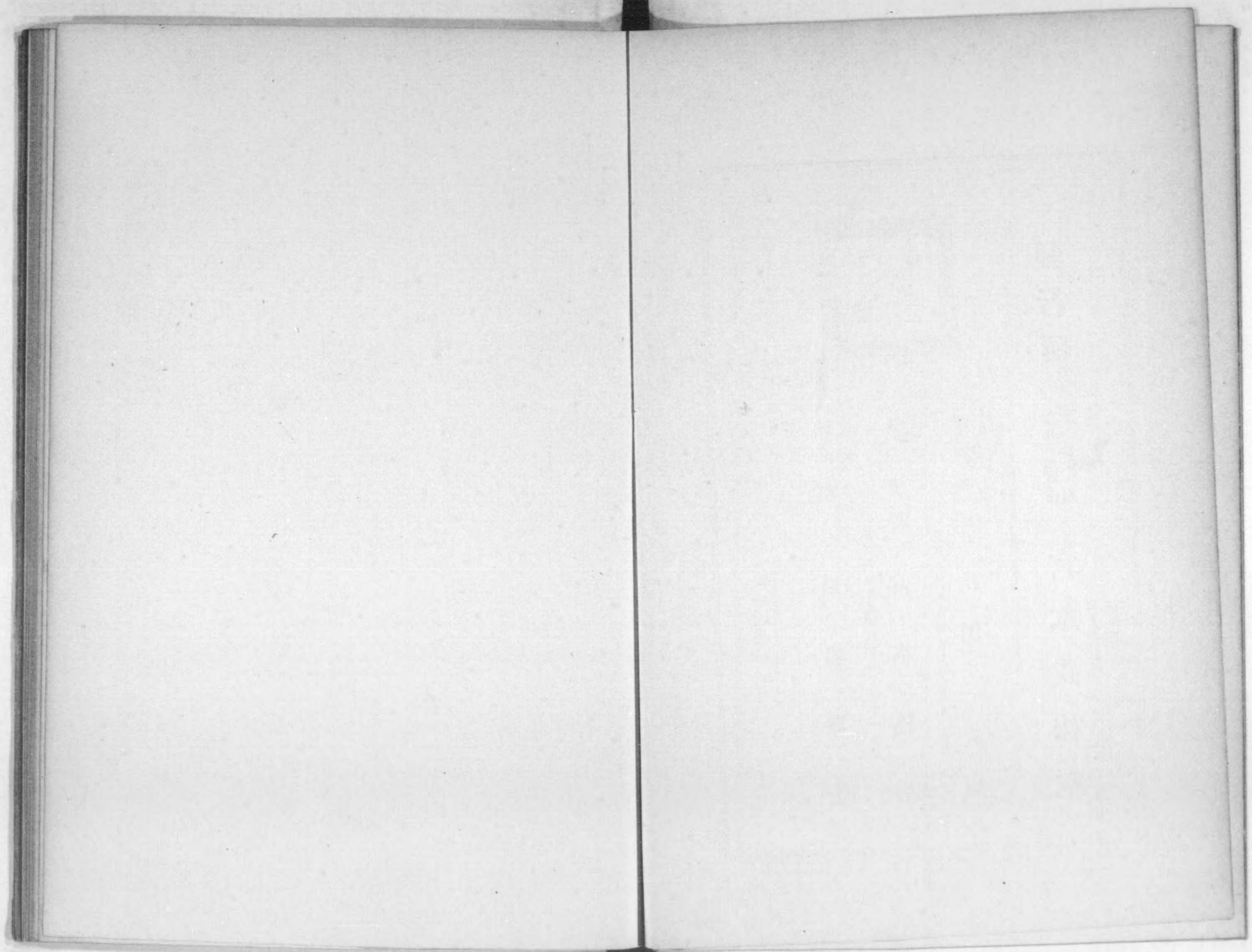


發行所

東京市麴町區
平河町

宮本武林堂

振替口座東京一〇九一二番
電話番町五五一八番



大正四年十二月（歪頭山攻略）

戰史評論

大正
5. 1. 10
内交

宮本武林堂發行

戰史評論

無名戰士評
成仁武夫補

第三十回 歪頭山の攻略

前回に於て述べたる如く露軍は遼陽の會戰に於ても、相變らず豫定の總退却を決行して遠く奉天南方渾河附近まで其線を退ぞけたが、我日軍に於ても此會戰に於て十日に餘る大惡戰を繼續したる結果として、直ちに敵に追尾して猛烈なる大追撃をなすこと能はずして、遂に煙臺附近に其先頭を停止せしめて錯綜せる隊伍の整頓を爲すの餘儀なきに至つたのであつたが。敵は此の我が追撃を敢てせざりし隙に乗じて大に其防禦配備を嚴にすると共に、全力を盡して頻りに其軍隊の増援を急いだ爲めに、日ならずして本國よりの大軍

の補充を掌握するに至り、今度こそは確かに日軍よりも露軍の兵力が遙かに優勢であるといふことを、無闇に劣勢を呼號する黒鳩公將軍迄が確信するところが出来る場合となつたのは、秋も早や稍、肌寒むを感ずる明治三十七年の十月上旬であつたのである。

世界的に常退將軍のあだ名を賜はつた黒鳩公將軍も、此の莫大なる兵力を己が掌中にしつかと握つて見るとまんざら悪い氣持はせぬ、一つ今度こそ思ひ切つて大攻撃前進を決行して鴨綠江以來の大恥辱を雪ぐと共に、連捷に勝ち誇りたる日軍を物も美事に一舉に突撃破砕してこれを西方の中立地帯の方へ壓迫して、全く其退路を絶ち再舉の出来ぬ程な大打撃を與へたる上、此的一幕で日露の戦役の千秋樂をシャン／＼とやるといふ大勇氣を振ひ起して、こゝに大舉南進を企だてたのは實にまことに適當なる處置であつたが。悲しい哉なさけない哉戦役に於て黒鳩公將軍が其自著の書物の上に於て論じたる如く、日軍に數倍する兵力を以て遠く東方山地より日本軍陣地を迂

回して、日本軍の主力を西南方に撃退し遼河々孟に逐ひ込んで、終に中立地帯に壓迫するといふ大任を負ふたる東部兵團長シタケルベルグ中將は、頗ぶる勇猛な將軍ではあつた様であるが、全く黒鳩公將軍の評語の如く

『彼ハ全ク大兵ヲ指揮スルノ能力ヲ缺ケリ』

といふ人物であつたらしいので殆んど何等の手柄をも奏せずして、劣勢なること遙なる日軍の爲めに散々なる目にあはせられて、道路嶮難山地狹隘なる土地に於て困難至極の大軍の退却をやるといふ大失敗に陥つた。一方現在の陣地を固守して東部兵團が其迂回を充分成功せしむる迄、貧乏搖ぎもしてはならぬと兼々堅くいひ含めて置いたる、西部兵團長ビリデルリング大將は老人ではあるが確かに金聲ではない等であつたのに、何と黒鳩公將軍の此の命令を聞き間違へたものか、少しく戦闘がむづかしくなると不相變の退却を始めてくれたので。大優勢の軍隊を併列し摧朽破竹の勢を以て、大山元帥の日軍を南滿洲の野の到る所に席卷すべき等であつた大南進も、却て日軍の爲

めにあべこべに大邀撃大逆襲を喰らつて仕舞て、東西及總豫備の三兵團共に僅々三、五里進出したばかりで、ドッコイやらぬと又々北方に押し戻されて、すつたもんだの終り辛ふじて沙河北岸の線に據つて日軍を喰止め、其紛亂せる隊伍を整頓せざるを得ざるの羽目に立ち至つた。即ちこれが露軍唯一の攻撃動作で有名なる沙河の會戦であつて、此の會戦に於て敵の東部兵團は我が勇猛果敢なる第一軍の爲めに追ひまくられて、沙河の北方に全く其軍隊を退ぞけたが、我軍も随分骨が折れたので近くこれに追ひすがらずして、若干兩軍の間に距離のある所が方々に出來たが。その最も廣い場所が何れであつたかといふとそれが歪頭山附近であつて、惡闘苦戰の後に沙河北岸に止まつたる露軍の方では。其日軍との間に若干の距離が出來た上に、其間には波状をなせる山地が横たはつて居るので少しも軍の模様が知れぬ。これではいつ何時如何なる不意な戦をしかけられるかも知れぬと、少なからず心配したる東狙兵第五師團長は、自己師團の半部を以て其面前なる彼我の中間に空を摩して

聳え立てる歪頭山に、まだ日軍が大兵を以てこれを占領せぬのをもつけの幸機として。一度退却したる師團の半部を率ゐてとつて返して若干の輕戦を交へたる後、何の苦もなく此の歪頭山を再び其手に占領したのは沙河會戦の終りに近い十月十五、六日頃であつたのである。

抑、この歪頭山の地形たるや彼我兩軍の間に介在して、沙河南岸に於ける此附近一帶の山地中一番に秀抜したる小山であつて、上に小祠がある邊からは一望千里實に展望自在であるので、此の歪頭山が東狙兵第五師團の手には入つてからは、露軍の方では非常に日軍の動靜を偵知するに便利を得た、即ち是れ歩兵操典に於て其第二部の第九十五に

『山地ニ在リテハ攻防共ニ敵ヲ瞰制スベキ位置ヲ占メ(中略)一部隊ト雖若シ最高處ヲ占ムルコトヲ得バ敵ノ動作ヲ觀察スルコト易ク其志氣ヲ挫折セシムルノ利アリ(下略)』

と明瞭確實に記述してある如く決して此の小山が直接に敵の防禦に利益す

る所はないけれども、此の附近一帯にない最高地であつて、それを露軍の方で占領したのであつて見れば、日軍は殆んど突然目の上に大啖瘤の出来たと一般、此地點から一望さるれば日本第一軍殊に直接其前面に居る所の梅澤少將現中將の指揮する、近衛後備旅團などは全く其眼下に見下だされることになるので、舍營に於て一兵卒が便所にゆく所までも見落すことなく看取することが出来るのであるから、間接に露軍の防禦に利益すること莫大であつて、此の展望所は實に露軍にとつては大切至極のものである、それと同時に日軍の迷惑と不利益は申迄もなく言語同斷頗ぶる非常なものであつた。

此の歪頭山の再度の占領計畫が東部兵團長の意圖であつたか、又は東狙兵第五師團長一人の考案であつたかは戦史の上では明瞭を缺いて居るが、其處置たるや實に申分のない適當なるやり方であつて、遂に優勢なる敵の東部兵團を無理やりに撃破したる我が第一軍が、苦戦惡闘をくり返して敵を沙河北岸に退ぞけて、彼れも取りたいこれも占めたいと氣はあせれども手が足らず

力が及ばぬその中に、敵の爲めに先んじて此の要害の地を占められたのは實に遺憾千萬であつたが、蓋しこれ我が日軍の此會戦の全體の有様の上から推して見ると實に已むを得ぬ次第であつたのであつたが。さればとてこれを其儘にして置く以上は我が梅澤支隊の企圖計畫は一厘一毛も現金掛値なしに敵の眼中には入るのであるから、大不利益の骨頂である而已か、日中はうかとは小便にも外へは出られぬといふ様な不自由千萬な譯合で、頗ぶる都合のよくない上に第一其志氣に關すること尠なからぬ。そこで直接其大損害を受けることの多大なる梅澤少將は、大奮發で獨力之を攻撃することに決心して、黒木軍司令官に意見上申をして其許可を得ることになつたが。露軍に於ても此の歪頭山を失なつて仕舞ては、それと同時に此方面の敵情が全く此の山の蔭にかくれて仕舞て、盲人の杖に離れたと同様になることを知つて居るので、占領以來手を盡して非常に堅固なる工事を施こし、塹壕は全體に掩蓋を設けて敵の砲撃に堪へ得る如くし、狹隘なる山頂を悉皆塹壕を以て圍繞して、獵

兵其他の選抜兵千二百餘名と機關銃五挺とを以て之を頑強に守備して居るの
で、彈丸黒子の一小山ではあるがこれを攻撃するのは實に非常に困難なる事
業の一つであつたが。前にも既に述べたる如くこれを逐ひ拂はぬ以上は我第
一軍の軍情は何も彼も敵につゝぬけに知れるのであるから、如何なる大困難
を冒し如何なる大犠牲を拂つても、これを攻略せねばならぬといふ羽目にな
つたのであつたが、其時日はたしか沙河會戦後の十月廿四、五日の事であつた
と思ふ。

露軍に於ては此の一展望所を頗ぶる重要なものとしたので、勇猛なるボ
ボウキチ、リポワツ大佐の指揮する所の、東狙兵第十八聯隊第三、第四、第五、
第六、第八、第九の六個中隊及同聯隊の徒歩獵兵隊それが合せて銃數一千九挺、
更に東狙兵第十七聯隊の徒歩獵兵隊が銃數六十挺、西伯利歩兵第二聯隊の徒
歩獵兵隊が銃數一百四十挺、合計銃數一千二百十九挺の上に、機關銃五挺を
加へて少數ながらも露軍の精銳をこれに集めて大に防禦に力を盡し。歪頭山

頂南端の代家峪西方高地上には、半圓形に四個中隊に要する四個の塹壕を山
頂を圍繞して構築し。其北方の最高處へは約二中隊を入るべき複廓式の閉鎖
せる塹壕を作り、更に其北に西向せる一中隊の塹壕を設けたる外、其北方即
ち同山頂の北端にも約三中隊を入るべき山頂を圍繞せる塹壕を構へ、北方山
麓の斜面にも二、三の塹壕を準備して、防備をさく／＼怠りなく頗ぶる頑強に此
の展望所を維持すべく計畫したるは、露軍が如何に此の一小山を大切に思ふ
たかの一斑をこれによりても推知し得られるであらふ。

乍併此山頂たるや峻峻狹隘にして他山を抜いて聳立し高く蒼空を摩して居
るのであるから、歩兵操典第二部第九十八の第二項に

『山頂及山腹ニ設クル防禦工事ハ敵ノ彈巢トナリ易キヲ以テ種々ノ手段ヲ盡
シテ之ガ蔭蔽ニ勉メザルベカラズ』

とある而已か工兵操典第二部第百五にも

『前略』特ニ山頂及山腹ニ於ケル陣地ニハ敵彈ノ集中ニ對スル掩蔽ノ設備ヲ行

ヒ云々』

とある如く充分に敵眼に其工事を隠すの必要があるのであるが、前にも既にいふ如く狭くして嶮はしい山頂のしかもそれが頗ぶる文字の如く歪頭であるのであるから、これが始末には頗ぶる都合よくはまいらぬのであつて、到底これ等の工事を敵の眼から見えぬ様にすることは不可能であつた。かくして露軍は其殆んど悉皆を掩蓋を以て防護したる、極めて安全なる極めて堅固なる塹壕としたのであつて、これが爲めには晝夜勞苦を厭はずして上下必死に土工に憂き身をやつしたのであるから、其攻撃の非常に困難なるべきは論ずるまでもなく容易ならぬものであつた。

敵が日軍の彈巢となるべきを覺悟して、それに對抗し得る如く築造したる此の山頂の小堡壘團を攻撃する爲めに、梅澤少將は如何なる方法を用ひたかといふと、それはいふ迄もなく先づ砲兵の多數を以て豫め工築物を破壊し、以てこれを非常に苦しましめるの手段をとつた。これ實に極めて適當なる處

置であつて何人と雖ども此策に出づるの外はあるまい、而して其砲撃のやり方は如何にといふと、先づ大略左に述るが如き配置の仕方であつた。即ち敵の陣地を南方に距る、約一千米突の八盤峠溝東方に、十月二十六日に始めて此の支隊に轉屬せしめられたる徒歩砲兵第二獨立大隊の一中隊を置き、これに歪頭山上の敵壘を目標とせしめた。其東南方敵を距る、こと約二千米突の上柳家峪南方高地に、第二師團の後備砲兵第一中隊の二小隊を配置して、歪頭山東部半圓形の敵陣地を目標とせしめ、其残りの一小隊は此の中隊の舊陣地たる馬耳峪南方に其儘残し置いて、達子堡附近の敵砲と相對抗せしめて、さて砲兵第十二聯隊第六中隊を上柳家峪東方陣地に就けて歪頭山東側の敵に對せしめた。これだけではまだ其砲兵の威力が充分でないと考えた梅澤少將は、右の砲兵の配備を通報すると共に右隣の第十二及び左隣の近衛の兩師團に向つて、應分の砲戦加勢を申し込んだので兩師團長は何れもそれを快諾して、第十二師團は野砲第十二聯隊第五中隊を彼蔭寺山の絶頂に布陣せしめ

て、歪頭山頂北端附近を約二千米突の射程を以て猛射する如く計畫し。一方近衛師團に於ても其砲兵第三、第四中隊を、馬耳山の西東兩山腹に陣地を選ばしめて、これは約三千米突の距離から敵陣地の兩側を射撃するといふ段取りであつて、それ等の配備が十月二十七日の午前八時までに極めて都合よく何れの方面も出来あがつたのであつた。

即ち此の歪頭山頂の敵陣地は東、南、西の三方面から、極めて有效なる砲兵の良射程を以て、野砲五中隊、重砲一中隊から猛烈なる集中火を被むるべき運命の下に立たねばならぬことになつた。然るに敵は沙河の北岸に據れる露軍の本陣地から、遙かに南方に孤立前進して歪頭山頂を占領した爲めに、自己の砲兵の位置は非常に後方にあるのであるから、日軍砲兵の此の集中的砲撃を妨碍せんとするも少々彈丸が其陣地まで届き兼ねるので、全く日軍砲兵は何の危険をも感ずることなく、殆んど射撃演習的に充分なる猛射を敵に浴せることが容易であるから、此の砲撃は實に此の歪頭山上の露軍にとつては、何

よりも苦痛であつて又何よりも恐るべきものであつたのであるが、何をいふにも其本陣地までは二、三千米突の距離があるのであるから、之を如何とも詮方ないといふ大不利益な位置に甘んじて立つに至つたのであつた。

梅澤支隊及び其左右にあつたる兩師團が、歪頭山に對し包圍的に砲兵陣地を選定して、先づ何よりも先に敵の塹壕を破壊飛散するに勉め、特に重砲兵一中隊を態々第四軍から轉屬せしめて、悉皆掩蓋を以て土龍の如く土中に蟄伏しつゝ、頑張つて居る露軍を、塹壕諸共其頭の上から飛散破裂せしめんとしたる手段は頗ぶる適當である壯快である。此様な敵陣地を充分に砲撃せずして攻撃することは不可能であるから、これが附近にある限りの砲兵の力を集中したのは最も同意する所である。野戰砲兵操典第二部第四十四に曰く

『攻撃點ニ優勢ノ兵力ヲ使用スルハ攻撃部署ノ要訣ナリ故ニ砲兵ハ其優勢ナル火力ヲ決勝ヲ企圖スル方面就中攻撃點ニ集中シ得ル如ク陣地ヲ選定スルヲ要ス云々』

とある原則に遵ふて三方より此の歪頭山頂に、三十六門の猛火を集中し得る如く巧に陣地を選定したる而已か、同操典の第二部第四十五の第一項に

『砲兵陣地ヲ敵ヨリ如何ナル距離ニ選定スベキヤハ状況ニ關ス然レドモ勉メテ敵ニ近接シテ之ヲ選定スルヲ要ス云々』

とある條文をも顧慮して遠きも三千米突近きは千米突の距離を以て、此歪頭山の敵陣地を包圍したのであるから、敵の陣地を確に見ることが出来る上に、我攻撃歩兵の諸動作も亦容易に知ることが出来る。であるから其火力を適時に發揚して十二分に歩兵に相協同して、味方の加勢をすると共に大に敵を苦しめることが出来るのであつて。其上に敵の砲兵は距離遠くして我に危害を及ぼすことが不可能であるといふのであるから、此日の砲兵は全く安心して其全力を歪頭山上に集め得るのであつた。であるから此砲兵の攻撃前に豫め行ふ攻撃準備射撃の配置は、實に都合よく部署せられたものと斷言するに躊躇せぬのは、強ち評者一人のみではあるまいと自分は考へる次第である。

明治三十七年十月二十七日即ち攻撃の當日拂曉よりして砲兵は前述の如く仕度をして、同日午前八時を期して各砲兵とも殆んど同時に砲撃を開始したので、其殷々たる砲聲は實に天地をも振撼崩潰せしめんかと怪しまれる程であつたから、敵に於ても何條黙して居るべきや遙に沙河を隔て、臺溝附近の陣地から、此の砲撃に對抗せんと盛んに應戦に勉めたけれども、何をいふにも五、六千米突以上の過遠の距離であるから、何等の効力がないのを知つて忽ちにして中止して仕舞たので。我は何等の顧慮する所なく全力を盡して山上の防禦工事の破壊に著手したけれども、何分にも非常に堅固に築いた所の、掩蓋附の塹壕であるから容易に大破墻孔を生ずるに至らぬ。これを守る敵も亦露軍中の精銳を選抜したる徒歩獵兵が多いのであるから、多少の破壊はあつたけれども直ちにこれを應急修理して、剛性我慢に防守して、頑然として少しも動かんとする模様を見せぬのであつた。

そこで梅澤支隊の歩兵は此場合如何に部署されて居たかといふと、同支隊

の右翼隊たる後備歩兵第四聯隊は彼蔭寺山から上柳家峪北方に亘る陣地を占領し、右翼隊たる近衛後備歩兵第一聯隊は、代家峪南方高地から八盤峪勾西方高地に亘る陣地を占領して、此左翼隊が専ら至頭山の正面に當つて居つて、更に其外に後備歩兵第二十九聯隊第一大隊を八盤峪勾南方に集合せしめて直接の攻撃隊として、支隊の自餘の諸隊即ち歩兵四大隊、騎兵約一中隊、工兵約一中隊は宿營地にあつて出發準備を整へあらしめた。これ要するに直接攻撃部隊は一大隊だけでも、左翼隊たる近衛後備第一聯隊に後歩第二十九聯隊第一大隊を加へて、それだけを以て至頭山を攻撃せしめて、さて場合によつては右翼隊をして之を援助せしめるといふやり方であつて、此配備も先づ先づ無難なやり方であるといふてもよいと思ふ。が併し評者の考へる所では随分と敵も澤山の兵を此山上に貯へて居る有様であるから、まだ其手中に澤山に歩兵がある以上は今少し兵力を攻撃部隊に加へて、萬一敵が如何に頑強に抵抗してもこれを撃破し、敵が獅子奮迅の勇を以て逆襲して來ても充分にこ

れを返撃敗走せしむる様にして置くが、評者は萬全なるやり方であると思ふのであつて。自分の意見としては此の攻撃には近衛後備の第一聯隊と後備第二十九聯隊の全力、即ち歩兵四大隊を使用するが適當であつたと思ふ。但し實際の此の攻撃には殆んど歩兵二大隊を以て萬事を結了したのであるから、其様に無益な兵力を使用する必要はないといふものもあらふが、攻撃部隊の占むべき正面は約二千米突もある上に、攻撃前進を決行すべき區域もさして狹隘でないのであるから、一舉にして此の要害を占領し様といふには、豫め充分の兵力を用ひるの準備をしてこれを攻撃するが安全である。で此の場合自分は後備二聯隊の全力を用ひて攻撃したならば、如何なる戦況の變化を來すことがあつても、餘りに狼狽することなく之に應じ確實に此陣地を奪略し得て非常に我に利益であつたらふと考へるのである。

一體此十月廿七日の攻撃の爲めに梅澤少將が眞の攻撃部隊として命令した兵數は、西久保少佐の率ゐる後歩第二十九聯隊の一大隊であつて、其他の諸

隊は陣地を占領して此の大隊の攻撃を臨機掩護する手筈であつたのであつて。此の様な非常なる要害堅固である上に敵が嚴重に工事を施したる峻山を攻むるに、よし如何に砲兵の準備砲撃を充分にする考へであつたとはいへ、其歩兵の向け方が餘りに過少であつたのは何故であつたらふ、實に了解に苦しむざるを得ないのである。評者などは更に其四倍を用ゆるも決して多過ぎはせぬと思ふのであるが、それをかく少數の歩兵で占領せしめんと計畫したのは、此の山頂が頗る狭隘で大兵を用ひ難いであらふといふ顧慮と、も一つ狭い／＼其山上に露軍の精銳が千二、三百も居るとは思はなんだ爲めであらふ。即ち梅澤少將は此の山上の露軍を以て微力なる一前進哨が、其展望任務を充分に盡さんとして堅固に工事を施した迄で、其兵力は一中隊かよし多くとも高々二中隊位のものであると判断したに相違ない。此の判断の間違が其攻撃部署の上に影響して來て、殆んど對等の兵力を以て此の堅固なる陣地の攻撃を企だてる様なことになつたのであつて、これ實に頗る不適當なる部署の

し方であつたと評者は思ふ。此場合近衛後備歩兵第一聯隊長三上中佐が獨斷で其一大隊を加勢させたから辛くも其目的を達し得たが、若し此の中佐が知らぬ顔の半兵衛をきめて居た場合には、此歪頭山の攻撃は必ず失敗に終つたに相違ない、これ蓋し梅澤少將の敵情誤判より來れる其歩兵攻撃部隊過少の罪であつて、偶然にして三上中佐の獨斷加勢があつた爲めにかつ／＼成效はしたけれども、其攻撃は實に危険千萬なものであつたのは事實である。

以上の如き砲兵及び歩兵の部署を以て、明れば十月廿七日の拂曉より猛烈に砲撃を開始して、前にも述べた如く三面から非常な猛火を集中したが。露軍砲兵の之に對戦したものは其砲數も少ない上に距離が頗る過遠であつたので、何の役にもたゞずして空しく砲撃を中止して、歪頭山の露軍歩兵は愈々我猛烈なる砲彈雨注の下に置かれることになつたが、例の堅固嚴重なる掩蓋のあつた爲めに他から少しも掩護してくれぬものなき此の山頂の孤立陣地も、容易に我砲火の破壊力を逞ましくするを許さなんだが、少なしと雖ども我に

は一中隊の重砲兵が極其山下の近い所に控へて居て、無二無三に打ち出すので流石の堅壘も所々に破壊の個所が見へ出して來たのであつて。それを目ざとく見付けたる梅澤少將は機來れりと考へて直ちに歩兵の攻撃に著手せんとしたのであつた。

丁度此時直接攻撃に當るべき約束の後歩第二十九の西久保大隊は、八盤峠勾南方に集合して攻撃の時機を待つて居たのであるが、午前十一時前後に我砲兵の效力漸くにして發揚せりとの報を得て、直ちに其將卒の負擔物一切を卸させて極めて輕き装をなさしめて、肅々として前進を起して三上中佐の近衛後備第一聯隊の工事を施して占領したる所の、小西勾北方陣地の高地脚まで接著してこゝで攻撃萬端の準備を整頓したのであつた。我が此の歩兵の陣地内の前進が展望自在の敵の方に見へたのであらふ、今まで沈黙して居た所の臺溝南方鞍部の砲兵も、方角違ひの代家峪東方の高地に向つて砲撃を再興し、更に新に唐家臺北方鞍部より約一中隊の敵砲が、近衛砲兵第三中隊に

應戦を始めた。これはさして恐れる程なものではなかつたけれども、今や歩兵が攻撃前進を始め様として居た其鼻先へ、敵の一度沈黙した砲兵が又々突然撃ち出すと共に、新手の一中隊がこれに加はつて砲撃を始めたので、西久保大隊は少しく其前進を躊躇せざるを得なかつたのは事實であつた。野戦砲兵操典第二部第三十七の第三項後段に曰く

『敵ノ砲兵沈黙スルモ過早ニ其戰鬪力ヲ失ヒタルモノト判定スルコトナク嚴ニ之ヲ監視シ隨時之ヲ制壓スルコトヲ圖ルベシ』

と記述してあるが實に然りであつて、此場合の如きは私の砲數が非常に優勢である上に、敵の砲兵は過遠の距離に居たのであるから、一度沈黙せしめられたと思ふた砲兵が復活して射撃を再興して、突然それに新なる砲兵迄が加勢したけれども、我はそれに對して充分に應戦するの餘力があつたから、何等さしたる不都合は生ぜんのだが、それでも一時歩兵の前進を見合せざるを得なんだのは事實であつた。であるから若しも此の中止的の沈黙を以て全

敵の力盡きたる閉息と誤認して、過早に攻撃でも始める様なことがあると、それこそ非常な苦戦に陥る様な羽目になるのは火を見るよりも明なることであると思ふ。

此の再度の露軍の砲兵の應戦も幾くもなくまた中止したので、我諸砲兵中隊は歪頭山に向つて益々其威力を猛烈に發揚したので、歪頭山の南部に據つた敵の歩兵は、我砲兵の威壓に堪へ切れなくなつた所から、巧に其行動を秘しつゝ、逐次に退却するの模様となつた。既に前進を命ぜんとして敵砲火の再興に一時見合せて居た梅澤少將は、直ちに西久保少佐に其大隊の半部を以て歪頭山の南端陣地を占領すべきを命じ、同大隊長は其第一、第二の兩中隊を提さげて勇往し、左翼隊たる三上聯隊は猛烈なる小銃射撃を以て、其占領陣地より此の二中隊の前進を射撃を以て援護した。我が砲兵の威力が充分であつた爲めに、此の大隊長の歪頭山南部の塹壕に達した時には、敵は此の線から全く退却して仕舞て居たので、苦もなく此の敵の第一線塹壕を占領して、歪

頭山の中央部に複廓的陣地を構へたる露軍と對戦を始めたが、これが二十七日の午後一時四十分から二時の間であつたのである。

一時敵砲火再興の爲めに西久保少佐は其前進を控へたが、これは實に至當であつたと評者は考へるのである、何故なれば僅々二中隊の寡兵を以て、まだ我が砲兵の充分に威壓の功を奏して居らぬ山頂の敵陣地に向つて、彼の隣岫たる峻山を攀登し始めたとしたならば、此歩兵は實に散々に瞰射の御馳走に預かつて其目的を達せぬは勿論、非常な損害を被ひつて敗退せざるを得ざるの苦境に陥つたに相違ない。然るに敵砲が突然其射撃を再興した爲めに、これを沈黙せしむるを待つ間に他の砲兵中隊は烈しく歪頭山南部の敵陣地を射撃してくれたので、敵砲兵が再び沈黙した之に敵歩兵の一部が退却し始めた、これを實に乗ずべきの最大好時機であつて、其圖をはげさず梅澤少將が西久保少佐の二中隊を前進せしめたので、何の苦もなく此の第一線の敵陣地を占領し得たのであつて。此の攻撃の實施は實に至當であつたと思ふ、が前

にもいふ通り其攻撃歩兵は頗ぶる需用を充たすに足りない少數であつたから、此の敵陣地一部奪取の成效と共に、忽ち前に立てたる計畫の誤りは明白となつて、極めて其兵力の不足であることが痛切に感じられて來た爲めに。八盤峠の最高地に控へて此の有様を實見した計畫者の梅澤少將は、即刻大急ぎで西久保大隊の第三、第四の兩中隊を、今占領したる歪頭山南部の陣地に急驅赴援せしめたが。それと同時にまだ其兵力の不足であるを知つたる三上中佐は、獨斷を以て其第二大隊を大隊長山岡金藏少佐に指揮せしめて、西久保大隊に應援せしめたので、これに歪頭山南部に我が歩兵二個大隊が協力して敵と對戦して、歪頭山中央部の敵陣地と相對抗することになつたので、始めて攻撃部隊の足だまりが確實に歪頭山上に作られることになつた。

前にもいふ通り梅澤少將は兵を澤山に持つて居たのであるから、兵力を澤山に使用すべき必要のある攻撃に當り、初め二中隊更に二中隊といふ様なしみつたれたる逐次増加をやらすして、陣地を守る左右兩翼隊は其儘にして

置き、此歪頭山の攻撃の爲めに初天邊から後歩第二十九聯隊を、八盤峠南方に集合して時機を待ち、機が熟したならば其第二大隊の全力を以て一氣に歪頭山を攻撃して、左翼隊をして其陣地からこれを掩護せしめたならば、狼狽して兵を加へる必要もあるまいし、又三上中佐が獨斷を以て加勢をする様な臨機な處置をせずとも、後歩第二十九聯隊の獨力で確かに攻撃だけは、立派に負擔することが出來て、萬事に都合がよかつたのであるが、餘りに兵の出し惜しみをしたのは梅澤少將の處置が至當でなかつた。結局金錢をつかふのも兵をつかふのも同様で、無益に大金を湯水の様につかふのは濫費ものとして禁治産にする代物であるが。さりとて一文錢を二つにかいてつかふといふのは、これも實に度し難き守錢奴といふの外はない。まして況んやそれが必要目前に迫れる場合に於て、有り餘る兵力の出し惜しみをするなど、とりも直さず此の守錢奴的の戰術を發揮したものであつて、此の手をやる様な吝嗇な人は忽ちにして『一文惜しみの百損ん』といふ諺の失敗に陥るものである。

梅澤少將がその様な失敗に陥るのを免がれたのは、要するに三上中佐の「獨斷の一大隊の加勢があつたからであつて、左なくば危うく「一文惜しみの百損ん」の爪に燈をともし連中に、齒せねばならぬ所であつたのである。

歪頭山南端の敵陣地を占領したる西久保少佐は、其二中隊を以て約敵陣地の右半部を占領して敵の歪頭山頂中央陣地からの猛射に對して、戦鬪を交へつゝ其工事を我に利用するに努力して居ると、其後方に梅澤少將が急速赴援せしめた部下の二個中隊が急そいで到着したので大に力を得て、更にこれも増加して敵の閉鎖的に構築したる中央陣地の攻撃を準備した。此間味方の砲兵は間斷なく我が此の西久保大隊に危害を及ぼさずして、敵の塹壘を破壊することを得る様な、巧に射撃を指向して猛烈に敵を制壓するに勉めて居た。此砲兵の處置は極めて至當であつて由來砲兵が味方を危くするを忘れて、其砲撃を手控へた爲めに八分通り我手に入つたる敵陣地を、忽ち敵に奪還せられた戦例は日露戦役に於ては算へされぬ程に澤山ある。であるから野戦砲兵

操典第二部第五十の第一項にも

『歩兵突撃ノ機迫ルトキハ砲兵ハ極力之ニ協同シ突撃ヲ決行スル直前マデ突撃點ニ向ヒ火力ヲ最高度ニ達セシメ敵ヲ震駭シ以テ歩兵ニ突撃ノ好機ヲ與フルニ至ラシムベシ(下略)』

と記述して戒告してあるのであつて、味方に危害を與へては勿論よろしくないけれども、味方に危害なからしめんとして敵をも安全にして仕舞ては、今一息最後の五分間といふ間一髪といふ大切なる間際に於て、却て敵の加勢をすると同一なる結果を持ち來すのであつて、此様な場合にはよしや多少の味方に損害を生じても致方ない、それは目をねむつて多くの敵を粉碎するに全力を盡すのである。それが爲めには砲兵が敵に近く陣地を占むるの必要もあれば、又砲兵が常に其技倆を鍛錬して射撃を巧妙に實施するの必要である。要するに今日の火砲は非常に其諸原の程度が精密に進んで居るから、戦鬪の爲め逆上して狼狽したり周章したりして發射をせぬ以上は、多くの場合

味方に危害を及ぼす様なことはないのであつて、實際の経験によると此の大切な場合に砲撃を緩めて、味方が勢を加へたことは少なくして却て敵に勢を加へたことが多い。現に旅順などでは我砲撃が始まると何れも安全なる掩蓋の下に逃げ込んで居て、其砲撃が少しく緩になるとそれ歩兵が攻撃して來るぞと、皆安全なる掩蓋の下からはい出して大に防戦をするのが常であつた、からして幾遍總攻撃を繰返しても敵陣地の直前まで迫つては追ひ還され、したのであつた。これ即ち砲兵が味方に砲弾の危害を及ぼすのを恐れて却て敵に安全を與へるといふ反對な結果を來したので、これは實に大に考へねばならぬことであるから、此點に付いて砲兵操典が度々くり返して記述して居るのは、全く此の旅順の教訓が其根元になつて居るのであるが。此の歪頭山の攻撃を準備した砲兵は其陣地が敵と近かつたのと、其山頂が峻峻で空中に秀立してある爲めに極めて彼我の識別にも困難が少なかつた爲め、何れの砲兵も少しも敵を制壓するの手を緩めなつたので、攻撃歩兵は非常に都合よく

敵と對戦することが出來たのであつた。

乍去前にも既に申述べたる如く、敵は小銃千二百挺と機關銃五挺を持つて居るのであるから、それを攻撃するによし三十餘門の砲兵が加勢をするとしても、千挺足らずの小銃の力而已を以て之を攻撃するといふのは少しく無理である、からして容易に其攻撃が進捗せなつたのであつた。先是西久保少佐が其大隊の半部を率ゐて攻撃の爲め前進を起すのを見て、其兵力の寡少を危ふんで居た近衛後歩第一聯隊長三上徳治中佐は、西久保大隊が歪頭山南端の敵陣地に到達すると同時に、其部下の一大隊を山岡少佐に指揮させて、獨斷を以て急歩西久保大隊に加勢させたが、此處置は評者は極めて同意であつて即ちこれが上級指揮官の意圖に合する如く、其獨斷專行を極めて穩健に決行して我軍に利益を與へたものであつて。此時既に八盤崎最高地にあつた梅澤少將は、西久保大隊の兵力が不足であることを切に感じて、直ちに其附近にあつた該大隊の残り半部を送つたのである。即ちその様に上級指揮官が急

に前線赴援の必要を感じた場合に於て、最もそれに近き陣地を占めて居た三上中佐が、少しも躊躇することなく、其一大隊を西久保少佐に加勢させたのであるから、つまり痒い所へ手の届く様に都合よく獨斷を以て協同動作が行なはれた譯であつて、歩兵操典第二部第四十三の第二項に

『各級指揮官ノ獨斷專行ヲ要スルコト遭遇戦ヨリ甚シキハナシ故ニ百方手段ヲ盡シ以テ上級指揮官ノ意圖ヲ満足セシムル如ク動作スルコト必要ナリ』

とあるがこれは遭遇戦に限つたことではなく、百方手段を盡して上級指揮官の意圖を満足させるといふことが、即ち獨斷專行なるものゝ精神であつて、それを目的として決行せぬ動作は即ちこれ我儘勝手であつて決して獨斷專行ではないのである。これを名づけて俗に擅恣の誤用といふのであつて、今此の三上中佐が山岡大隊を赴援させたのは丁度梅澤少將が、西久保大隊へ至急加勢をやりたいと思ふて居る其意圖に全く適合したのであるから、これぞ即ち眞實の獨斷專行のやり方である、歩兵操典の綱領第六に曰く

『協同一致ハ戰闘ノ目的ヲ達スル爲最モ重要ナルモノニシテ命令ヲ以テスル外各人ノ獨斷專行ニ待ツモノトス蓋シ兵種ヲ論ゼズ指揮官タルト兵卒タルトヲ問ハズ各自己ノ任務ノ遂行ニ努力スルハ即チ協同一致ノ趣旨ニ合スルモノニシテ戰況ノ變化ニ應ズル臨機ノ手段ハ一ニ各人ノ獨斷ニ待タザルベカラズ而シテ獨斷專行ハ必ズ軍人精神ヲ基礎トスル公義心ニ出デ時トシテ自ラ任ジテ友軍ノ犠牲トナルノ覺悟アルヲ要ス』

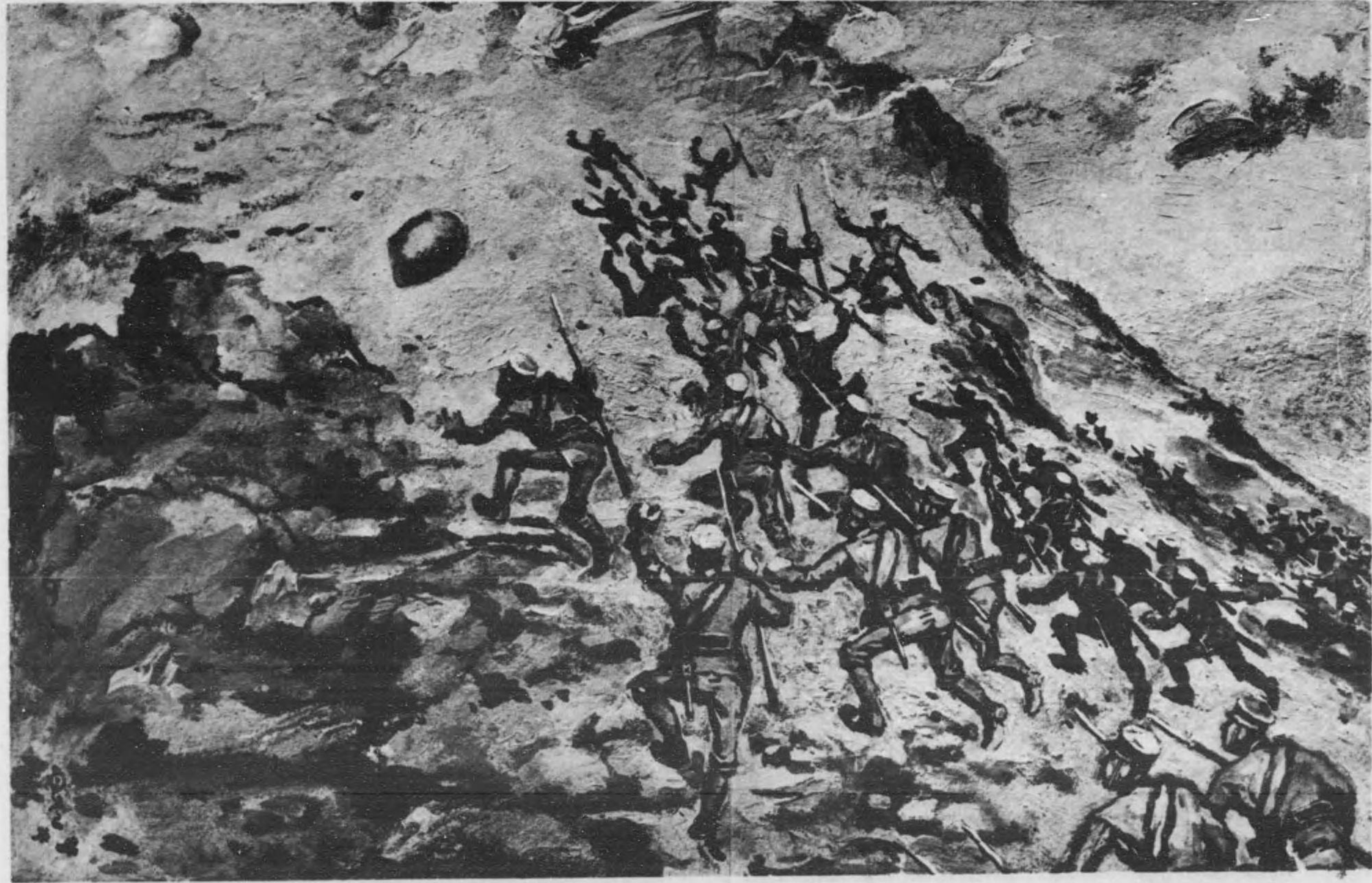
抑、獨斷專行ハ其精神ニ於テ服従ト相離ル、コトヲ許サズ常ニ上級指揮官ノ意圖ヲ付度シ必ズ其範圍ニ於テスベキモノトス然レドモ戰場ニ於テハ或ハ不意ノ變局ニ遭遇シテ其範圍ヲ超越スルヲ要スルコトナキヲ保セズ此場合ニ於テモ尙上級指揮官ノ意圖ヲ察シ之ニ投合スルコトヲ勉メ決シテ擅恣ニ陥ラザルヲ要ス』

實に明白に丁寧にかんでふくめる様に協同一致と獨斷專行の眞意義を説明して居る、此の操典綱領の明文と此の場合に於ける三上中佐の獨斷專行とを

照らし合して考へて見ると、協同一致と獨斷專行とが此の極小さな僅々一個大隊ばかりの戦線加入であるけれども、それが明瞭に此の一動作で適切に説明せられて居るのである、陣地を占領して居た儘で西久保大隊を援助すべき三上聯隊は、西久保少佐の兵力寡少にして歪頭山南端占領の容易でないのを見て、更に命令を待つことなく獨斷を以て山岡大隊を前線に増援させた。即ち單にこれだけの極めて平凡なる動作一つが、前に掲げたる操典綱領の條文と全く符節を合すが如く吻合して居る。であるから協同一致といふものは斯く行ふものであつて、獨斷といふものは此様な場合に斯くやるものであるといふことが、一目瞭然として知り得られるのである。

閑話休題さて西久保大隊が手少くなで困つて居るのを見て、直ちに前進増加を命ぜられたる山岡大隊は、其二中隊を第一線として西久保大隊の左翼に連繫する如く、歪頭山の西半部の方を前進し、残り二中隊は其後方から豫備として跟随して、午後二時四十分進んで西久保大隊の戦線と略、齊等に進出し

歪頭山上ノ接戰



九十九人石原白道畫

た。此間又々敵の沈黙したる砲兵が三度目の復活をやつて、盛んに此の大隊の前進に妨害を與へんとし、更に歪頭山上の中央陣地及び北端陣地を占めこゝを先途と防戦する敵兵も、形容の出来ぬ程な激烈極まる猛射を以て此の山岡大隊に彈丸を注いだが、勇敢なる此の大隊長は少しもそれが爲めに其前進を逡巡せず。これと同時に西久保大隊と其後方の陣地に據れる三上聯隊の他の一大隊は、相協力して射撃を以て此の山岡大隊の前進を必死に掩護したので、程なく此の大隊は西久保大隊と一線をなし得て、こゝに始めて歪頭山南端の敵の棄てたる陣地から、其東西兩側までの間に日軍約二大隊即ち約略守兵に倍するの兵力を展開し得たのであつた。

さて斯く敵に相接近することにはなつたが、敵は容易に其中央陣地を手放す様な模様なく極めて頑固に防戦する、我が兩大隊は協力して極めて不齊凹凸をなして居る、此の歪頭山の山頂を逐次に歩々前進して午後三時十五分頃には、彼の歪頭山頂中央陣地の敵に對し殆んど準包圍といふ様な位置を占め

るに及んだが、敵も去るもの何のそれしきに驚くものかといはぬばかりの大奮闘、一時日露兩軍は此の山上に相互に睨み合ひの姿であつたが。山岡少佐は其豫備たる第七中隊の二小隊を西久保大隊の右翼に延伸増加して、更に其中隊の中から二分隊の選抜決死隊を編成して、これを山頂の稜線上に突進せしめて直ちに中央陣地に迫らせ、其後方からあはよくば全線が跟随して敵の陣地に突入せんと企て、見たけれども、此の計畫は美事に失敗して仕舞て、山頂の稜線上に突進したる少數の決死隊は、敵の猛火に射すくめられて進退の度を失なつて仕舞い、後方からそれを援助せんとしても山の稜線に遮ぎられて、思ふ様にこれに加勢することが出来ぬといふ始末。其間に此の健氣なる決死隊は勇猛なる敵の逆襲を受けて惜しむべし此の大切な二分隊は、全員こゝに同じ枕に死傷して仕舞つたといふ大慘状を呈したが。一體我軍に於て古往今來よく行なはれる所の決死隊といふものは、大に熟考を費やすべき戦法であつて決して迂濶にこれを行ふべきものでないと評者は思ふ。現に此の

場合の如き全力を擧げて突進しても容易に敵を驅逐し難き際に於て、僅か十人か二十人の士卒を選抜して突進せしめて、果してそれに何をさせ様といふ考なのであるか。若し此れだけの人員を用ひて副防禦を除くとか障礙物を破壊するとかいふならば聞へて居るが、これを以て敵の強弱を濼踏みをさせて、敵が弱かつたならば猛然？起つて其後方から虚勢を張つて大吶喊を揚げて、聲を以て敵を威嚇してこれを驅逐するし。もし又敵が強かつた場合には、其決死隊を見殺しにして地物の蔭に閉息して居るといふ様なやり方は、評者は頗ぶる勇敢なる日本人の戦法として、極めて適當でない戦闘のやり方であると信ずるのである。

此場合の如きも山岡少佐は先づ自己大隊の占めたる、歪頭山西側の山稜の後方に其大隊を集結して置き、第七中隊を西久保大隊の左翼に加へて大に火力を發揚して、其勢を以て第七中隊の決死二分隊を突進せしめて山稜を超越して敵前に曝露せしめて、これに對する敵のせん様を見た上で後の動作を定

め様としたに相違ないが、可惜あたら勇士の二分隊は味方から少しも援助することの出来ぬ、味方の砲撃と敵の小銃火との雨注する山頂に曝露して、空しく死傷し盡すの惨状に陥つた而已か、此の少数の決死隊の悲惨極まる最後の有様は、味方全體の志氣を沮喪せしむること尠からずして、一時この地物へこべくり著いて貧乏搖ぎもせぬことになつて仕舞たのは、これ實に決死隊を極めて拙く使用した一例とするに充分であると評者は思ふ。決死隊を編成して敵情を搜索するとか、前にも述べた如く副防禦を破壊することを擔任させるとか、或はこれをして手榴彈を投擲せしむるとかいふ様に、效果あるべくこれを使用することは、評者も非常に同意であつて其様な場合にこそ、決死隊も一命の棄て甲斐があるのであるが。現在此の山岡大隊第七中隊の決死隊の如きは、全く敵の強弱の濼踏みの爲めに勇士二分隊を失なつたと同様で。これが味方の利益には少しもならずして、却て敵の強いといふことを味方に知らせる爲めに、二分隊の士卒に犬死をさせた様なものであると評者は

思ふ。一體全體日露戦役に於ける決死隊には強弱濼踏みの此の種のものが多かつた、からして決死隊は徒らに勇名を残したが其實效は甚だ見るべきものがない。これは今後に於て大に實地實驗して研究すべき事柄であつて、操典は何れの條文に於ても此様な士卒の使い方を規定して居らぬ。これ即ち意味甚深にして大に注意すべき大切な事柄であると評者は信ずる。

果せる哉此の決死隊の失敗は西久保、山岡兩大隊の志氣を一時大に挫折して仕舞て、此の線から容易に敵に向つて邁進することが出来なくなつて、空しく地物にしがみ著いて居る間に敵の火力は益々猛烈を加へて来る、味方の死傷は陸續として頻出する。全山を指揮せし勇敢なりし西久保少佐は忽ち負傷といふ厄に出會して、山上から後退して仕舞て其後任は第一中隊長の上田大尉が勤めるといふ有様、志氣頗る振はざる苦戦の狀となつたが如何にしても前進が出来ぬので、暫時此地で戦鬪を持続しつゝ味方の砲兵の一層威力を敵の頭上に加へんことを待つて居た、暫時ではあつたが此の間の困難は實に容

易ならざるものであつたのは、評者が詳しく説明する迄もあるまいと思ふ。一體此の様に彼我兩線が接近した爲めに、味方の砲撃が實は少しく緩んだらしいのである。それが爲めに味方は却て不利を招いて、敵は大に勢を得て我が決死隊を逆襲するといふ様な反比例の戦況を呈したのであつたが。遠からぬ我砲兵諸陣地から其有様を目撃したる味方の諸砲兵は、すはこそ一大事味方も敵も一所にして木片微塵にして仕舞へと――まさかに其様な亂暴なこともいふまいが――思ひ切つて、大々的の大砲撃を歪頭山上に指向してくれたので、古來名におふ歪頭山も此の砲撃の勢で山形全く一變して正頭山となつたといふ話し、これは實は笑談であるが其様な勢で猛射を始めたので、少しく味方の歩兵二大隊も其勢を恢復することになつて來た。けれども此の前後の山上二大隊の戦況は慘怛たるもので、實に全く危機一髪といふ兼合であつて。若しも此時後備歩兵第二十九聯隊が全部こゝに來て居つたならば、まだ早く安心して此の陣地を奪略し得たであらふといふ愚痴を、評者は此の場合

に於てこぼさるを得ぬのである。

斯く山上の兩大隊は苦戦を交へて居たけれども、まだ幸にして近衛後備歩兵第一聯隊の第六中隊は、最後の豫備として後方に控置してあつてまだ戦線に加はつて居らななだので、西久保少佐に代つて全山を指揮したる山岡少佐は此の一中隊を伍間に増加し、更に第七中隊の決死隊を出したる殘餘の一小隊を以て、戦線の最左翼に増加し殆んど全線に新銳の兵を入れて必死となつて戦勢の挽回に努力し、これと同時に味方の砲兵が技術と火砲の精良とを恃んで此の山上の歩兵の危険を聊かも懸念することなく、彼の野戦砲兵操典第二部第五十の第二項に

『突撃ヲ決行セバ敵ハ百方手段ヲ盡シテ抵抗シ若ハ逆襲ヲ試ムルコトアルベシ此際砲兵ハ我が突撃歩兵ニ最モ多ク危害ヲ及ボス敵ヲ猛射シ全力ヲ盡シテ突撃ノ成果ヲ完フスルコトニ勉メザルベカラズ此ノ場合ニ於ケル砲兵協力ノ適否ハ一ニ砲兵各指揮官ノ決斷及指揮ノ如何ニ存スルモノト

ス』

と記述したる此の『決断及び指揮の如何』といふ眼目に適する如く、多少は味方の危険を犠牲にして烈しき弾雨を降らしたので、さしも頑強なりし敵兵も大に浮き足しになつて來た様子。こゝぞとばかり山岡少佐は其最も援護射撃に都合のよい位置に居た、第五中隊に向つて烈しき急射撃を執行せしめたので、さしもの敵も頗ぶる動搖の有様を其全線に呈するに至つた。戦さに慣れたる山岡少佐何として此好機を逸し去らふや、直ちに嘯哨として勇ましき進撃の號音を吹奏せしめたので、山上の我が兩大隊は一時に起つて猛然として、彼の堅固を極めたる中央陣地に大吶喊を揚げて突撃したので、敵は多少の抵抗をして見たけれども勢到底敵せざるを知つて、二、三度途中で停止して其敗残兵を收容しつゝ、此の大切な歪頭山を棄て、退却したが。此際我が歩砲兩兵は歩兵操典の第二部第九十六の末項にいふ如く

『敵ニ大損害ヲ與ヘ得ルノ時機ハ通常敵ヲ山頂ヨリ驅逐シ得タル瞬間ニ在リ

故ニ此際ニ於ケル猛烈ナル追撃射撃ハ特ニ緊要ナリ砲兵及機關銃ノ一部ハ萬難ヲ排シ最モ速ニ追撃射撃ニ加ハラザルベカラズ』

彼れが歪頭山頂の北端から北方斜面に潰走するの機をはずさず、鐵霰鉛雨の大御馳走を遠慮會釋なく喰らはしたので、停止して收容せんとしたる敵兵は爲めに大に彈丸に食傷して、此の斜面の退却に於て死傷するもの算なしといふ大慘狀。

思ふ儘に頗ぶる猛烈なる追撃を、更に歪頭山村及び達子堡村に逃げ込む迄繼續して、射撃を以て存分に敵を潰亂せしめたので、敵の損害は非常なものであつて、其遺棄したる屍體のみでも四十餘人にのぼつたといふ有様であつて。今朝午前八時から始めた此攻撃は、同日午後の三時五十分を以て全く其目的を達し得たのであつたが。敵の守兵が山上から潰走する迄は敵の砲兵が手加減をして、餘りに烈しく此の山上を砲撃しなかつたので我占領諸隊は、少しく油断をして此の山上に隊伍を整頓して居ると、こゝぞ復讐の最好場合

と敵の砲兵は頗ぶる正確なる砲撃を此の部隊に指向したので、我が歩兵は爲めに思はぬ損害を被ひつたのであつた。

敵は前にも述べたる通り非常に堅固なる工事を施したが、其砲兵が此の防禦に充分の力を盡すことの出来なんだのと、その諸工事を敵に秘するといふことが絶対に出来ぬ地形であつたので、流石堅固なる歪頭山も三十六門の一日間の連続せる砲撃に敵し兼ねて、防禦工事は見る影もなく破壊せられた其の所へ、勇猛なる山岡少佐が新ら手を加へての攻撃には、流石のポポウキチリポワツ大佐もヒを投げて退却するに至つたが、敵の此の場合に於ける死傷は實に莫大なものであつて、殆んど其半數近くも失なつた上に、機關銃を二挺までも我軍に進上するに至つたのは、頗ぶる不覺であつたとはいふものゝ、如何に彼れ等が頑強に最後迄防禦したかはこれでも知れ様。斯くして彼我兩軍は其後大なる戦もなく此處に相對して沙河を其中間に挟んで、穴居式に相對陣せざるを得ざる次第となつて、こゝに愈々冬期の沙河の對陣に移つた

のであるが。丁度此時頗ぶる面白き出来事が露軍の高級指揮官の上に生じて來た、即ちそれは此の歪頭山攻略の小戦闘の前後のことであつたから、序にそれを此末に掲載して少しく紙數の餘りを塞ぐことに仕様と思ふ。

遼陽會戦の時にも其以前にも頻りと露軍の南進を希望したるアレクセエフ極東總督は、此の沙河會戦の場合にも大に大舉南進を主張したらしいのであつて。今度は黒鳩公將軍も溢々ではなく幾分乗り氣でこれに同意をして沙河會戦が始まつたらしいのであるが。此會戦が失敗に終つたらしいことが明瞭となると同時に、機敏なるアレクセエフ總督は大急ぎで其辭表を露帝陛下へ奉呈して骸骨を乞ふた。由來アレクセエフ海軍大將はこれまでも本意か否かは知れぬが、度々辭意を漏して居たのであるが、此の失敗の大責任を一身に背負ふて堅く其辭意を聽許せられんことを懇願したのであつた。露帝も此の大敗に對して責任者を其儘にして置く譯にもゆかなんだのであらふ、たしか十月廿三日即ち此の歪頭山の攻撃計畫が我軍に於て始められた頃に於て、

左に掲ぐる如き優詔を賜はると共に、殆んど極東副王たる権限を有せる總督の印綬を解かれて本國に召退され、更に帝國評議員といふ閑職に轉補せられたのであつた。

「朕ハ卿ガ極東陸海軍總司令官ノ辭意到底齷スベカラザルヲ知リ之ヲ允許セザルヲ得ザルニ至レルヲ遺憾トス朕ハ卿ガ多難ナル戰鬪初期ニ於テ總督ノ職務軍隊ノ編成及ビ配備等ニ關シ複雑ナル勤勞ニ堪ヘ能ク極東軍隊ニ至當ノ指導ヲ與ヘシニ對シテ感謝ヲ表ス」

此の勅語は十月二十三日ツアルスコエ、セロの露帝の宮殿から在ハルビンのアレクセエフ大將に對し發せられたものであつたが、同大將は十一月の末にハルビンを出發して露都に歸著すると同時に、更に重ねて從來の勤勞を賞するの勅語を賜はりたる上、此の敗軍の大將を物好きにも「ケオルギー」三等勳章の佩用者に列したのであつた。これでは何故に此の大將を免職したのか少しも其理由が知れぬが、要するに極東敗戦の責任の背負ひ手がなくては、國民

に對しても都合がわるいといふ様な所から、此の大將の辭意あるを幸に免職せしめたのであるらしいが。責任回避に付ては非常な祕訣を手に入れて居る同大將は、餘りに其責任の重くならぬ中に到底勝目のない日露戦争の責任、而かもそれは自己自身が主張して作製したと同様なる日露戦役の大責任を、巧みに黒鳩公將軍の双肩の上にそつと移して、名前だけ戦敗の責任負擔者となつた譯であつて、露帝始めの失敗の責任を一身に負ふてくれたお禮として、彼は本國で「ケオルギー」三等勳章を賜はつた上に、閑職とはいへ帝國評議員兼内閣評議員といふ重職をもち得たのであつて、此大將の猾智にたけた振舞には何人も舌をふるはざるものはあるまいと思ふ。

此の十月二十三日のアレクセエフ大將に勅語を賜はつたと同日を以て、沙河會戦の直接の責任者たる黒鳩公將軍に對しても、亦た左の如き優渥なる勅語を賜はつたのであつた。

「朕ハ極東總督侍從將官アレクセエフノ其職ヲ解クニ當リ卿ニ其後任ヲ命ズ

ルヲ以テ最モ國家ノ福祉ナリト認メタリ
卿ガ戦鬪ノ經歷ハ滿洲ニ於ケル既往ノ行動ニ依リテ鞏固ヲ増セリ故ニ卿ハ
朕ガ勇武ナル軍隊ヲ指揮シ頑強ナル敵軍ヲ破碎シ以テ露國ノ爲メ極東ノ平
和ヲ擁護スルニ足ルベキヲ確信ス』

下すものも下すものであれば、又受けるものも受けるものであると評者は
思ふ。卿が滿洲に於ける既往の行動が其戦鬪經歷を鞏固にするといふに至つ
ては、流石に厚顔無恥なる黒鳩公將軍と雖ども確かにだじく／＼とせざるを得
なんだに相違ないと思ふが、それを平氣の平左でお受け致したに至つては實
に言語同斷沙汰の限りである。殆んど此の勅語を一方から考へて見ると全部
が黒鳩公將軍に對する、反語的の耳こすりや面あてばかりである様に、我々
評者どもには思はれるのであるが。正直な？露人には其様なまはり氣は全く
ないものと見へて、此の勅語を正面から難有く頂戴して得々として總軍司令
官となり濟ました黒鳩公將軍の心理は、確かに日本人では到底其心底を忖度

することは出来兼ねると評者は思ふ。

日露の大戦役を物好き千萬にも手造りにして、甚だしい無益の殺生をした
上に連戦連敗で少しく其位置が危くなりかけて來ると、直ちに無責任千萬に
も巧に其責任を一身に負ふた様な顔をして、更に大なる責任の加はるのを回
避したる、アレクセエフ大將の頗ぶるづるやの親方であるのはいふ迄もない
が。直接敗戦の全責任を負ふべき黒鳩公將軍が、前掲の様な其事實とは全く
反對なる賞賛的の勅語を拜受して、意氣揚々として軍司令官となるに至つて
は其心事が我々には推量し難いのである。此様な無恥なる考を以て其職に當
るのであるから、又しても大敗北に終つて仕舞たのも無理ならぬことであつ
て、前にも一寸此の戦後に於て黒鳩公將軍が其著回想録に於て、沙河會戦の
部下の將軍を殆んど罵詈的に批評して

シタ東部兵團長は大軍を指揮するの能力を缺けりとし、又其西部兵團長の
ピリ大將に對しては、老朽用をなさずと思ひ切つて評して居るが。併し評者

の見る所を以てすれば、シタ中將もピリ大將も確かに黒鳩公將軍の評語の如き人物であつたに相違ないと思ふが。それと同時に更に一段深く立ち入つて乃公御本人の御手元拜見と出たならば、黒鳩公將軍は果して自己を何と評するつもりであらふか。蓋し此の將軍が前述の様な詔勅を恥かし氣もなく、全く自己の戦歴に對する御信任状でもあるかの如く信じて、得意で其重大なる職務に就いたものであると見ると、此の將軍の不明は確かにシタ將軍の無能やピリ將軍の老朽よりも、より以上に頭抜けて居ると評者は思ふ。

乃ち不明にして自信に篤つき總軍司令官の下に、無能と老朽の兩兵團長が居たのであるから、沙河會戰の全敗に終らなんだのはまだ、拾ひものである。去るにても此歪頭山の守兵の如き勇敢なる澤山の兵を持つて居りながら、遂に唯の一度も日軍に勝つことを得ずして、二年に渉る戦役を全敗を以てお仕舞にしたといふのも、これ全く此の不明と無能と老朽の致す所であると評者は信ずる。これは決してよそのことではない、そんなじよそこ

らにも之に似寄つたことは澤山ある、我日本軍の如きもいゝ氣になつて油断をすると同じ経路をふむことになるのは目前であつて。今や世界は大戦亂の渦中にありといふも不可なき場合、そこへ又お隣りの人間に毛の三本足りぬ袁公どのが沐猴にして冠すと、柄にない大洒落をやり出して御座るので始末におへぬ。此の様な國歩の極めて難義なる場合に於て、老朽無能不明の三長物を國軍から削除することに嚴重に意を用ひなんだならば、忽ちにして露軍の覆轍をふむことになるのは請合である。皮肉の好きであつた一休和尚宗純老の悪戯ではないが、最早大正五年の新年も近いことであるから、評者は此の一冊の戦史評論を杖の先へひつかけて、恭賀新年を述べる代りに御用心御用心と全國軍の將校方に注意すること如件

年將に逝かんとし年將に來らんとす、去るものは追はず來るものは拒まずと濟して居らないでも、光陰は飛彈の如くさつさと先へ御免を蒙むる。評者は本年の夏以來非常に多端なる位置に立つて日夕寸暇もない

といふ有様、爲めに讀者との約束に背むいたことが多かつたのは、深く恥ぢ入る次第であるが少しく閑を得たる十二月になると、今までとんと其様なことを覺へなんだ左の手が、夜になると鈍痛を催して眠られぬこともあるといふ爲體、爲めに此評論第三卷の末尾に當る本號が、又々期日より遅れるといふことになつたのは、出版書肆にも讀者にも何と申譯の致し方もない次第であるが。氣のすゝまぬ面白くない場合には、筆を持つても少しも適切な評論が胸に浮んで來ぬので、一、二枚の原稿紙を書き爲めに二晩も三晩も考へるといふ有様、それに反して興來り氣滿つれば千萬言もたちどころに成るのであるが、こればかりは人間業ではゆかぬのであつて、全く天來の神感をまつの外はないのである。など、鹿爪らしく辯解をして見るものゝ要するに、評者の怠りといふことは重々確かに自分も承知して居る次第である。で何卒今年は京都で曠古の御大典もあつた年柄であるから、其喜の餘りに『エライヤッチャ』『オドリンカ』で

後半年の評者が大脱線をしたものと善意に解釋せられて、今後もこれに懲りたまふことなく、何のお役にもならぬほんのつまらぬ此の評論をも、更に愛讀せられんことを切望に堪へぬ次第である多罪死罪。

大正乙卯除夜有感

今冬左手痛寒風
徹夜難眠陋屋中
處世由來無及嗚
人間畢竟不如聾
堪憂禹域風雲惡
唯喜神州禾穀豐
兀々擁衾思往事
紙窓微白日昇東

成仁 武夫慚稿

題畫龍

一幅雲龍妙迫真

隣客模形神未入

無名 戰士初稿

躍風掣霧角鱗振
不知誰是點睛人

大正五年一月十六日印刷
大正五年一月十九日發行

戰史評論與附

著者

無名戰士

發行者

宮本林治

印刷者

山田三太郎



發行所

東京市麴町區
平河町

宮本武林堂

振替口座東京一〇九二二番
電話番町五五一八番

東京市麴町區平河町四丁目十一番地
東京市赤坂區田町五丁目十一番地

T 氏 著

步兵中隊戰鬪教練

菊判洋布製
價 六拾錢
郵 稅 八錢

內 容

總論—中隊戰鬪教練ノ根本義—計畫(計畫ノ素因。計畫ト實施ノ關係。教育量。使用時日。地形。空包。想定……)—實施(指導法。教練ノ活氣。射擊指揮。援隊)—講評—計畫實施ノ範例—結論—附表(中隊戰鬪教練ニ於テ教育スヘキ事項。第二期中隊戰鬪教練教育計畫表。同上細目教育計畫表)—引用附圖(青山、代々木練兵場五千分ノ一圖)

本書ハ教育家トシテ。戰術家トシテ。射擊家トシテ。且ツハ所謂精神家トシテ常ニ世人ノ。而シテ軍隊ノ模範テウ名聲ヲ恣ニセシT氏ノ著ニ係ル權威アル罕觀ノ一書ナリ。其説ク所ノモノ。中隊戰鬪教練ノ根本主義ヨリ其實施計畫ノ細目ニ至ル迄順ヲ逐ヒ序ヲ尋ネ幾多ノ實驗ト統計トニ鑑ミ。解シ易ク且ツ直ニ實施シ得ル如ク懇篤細説到ラサルナシ。正ニ是レ大正現代ノ軍隊教育ニ向テ最モ大ナル光明タルト共ニ最モ新ラシキ指針タラスンハアラス。由來中隊教練ニ關スル著書尠シトセサルモ本書ノ如キハ蓋シ空前ト言フヲ憚ラス。是レ敢テ世ノ中隊教育ニ任スル各官ハ勿論中隊以上乃至中隊以下ノ教育ニ參スル諸官ノ爲ニ座右ノ珍トシテ特ニ推獎スル所ナリ。

發行所 東京東區平河町四丁目二番 宮本武林堂

次回刊行 豫告 望臺ノ攻略
戰史評論

319
283

終